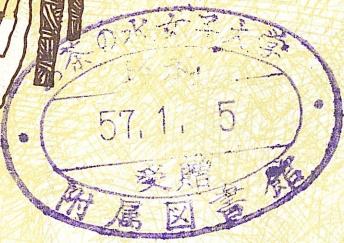


幼稚園・育所・家庭

N<4  
1  
811

# 幼児の教育

第八十一卷第一号



1

重度障害児教育の新分野をひらく……

# 障害児のムーブメント教育 原理と指導の実際

新刊



小口勝美・小林芳文・高山忠雄 編

障害児教育の新しい方法として世界的に注目されている運動(動き)を中心とした教育理論を、わが国でさらに研究、実践をつづけ、動きの少ない子どもの指導から重度精神遅滞児の教育、自閉症児のスイミング療法など、最新の豊富な実践事例で紹介する。

A5判・320頁・定価2,900円 ￥300円

## 精神薄弱児の教材教具

A 5 判 328頁 定価 2,000円 ￥300円

特殊教育教材研究会著

三木安正・山口 薫・武内二三雄 編  
精神薄弱児の教育をスムーズに行なうために教材・教具は重要な意味をもつてゐる。本書は、感覚訓練・運動機能訓練・身辺生活の処理能力・集団への参加・生活経験を豊かにする、生産的生活意欲を高める等の教育・訓練に適した教材・教具及び実践事例を豊富に紹介する。

## ちえ遅れの子の養護・訓練

A 5 判 240頁 定価 2,400円 ￥300円

特殊教育教材研究会編

精神薄弱養護学校及び特殊学級における「養護・訓練」の意義と指導領域、課題等を明らかにし、教育現場での受けとめ方を、感覚機能、運動機能、職能の訓練、言語の訓練と治療など具体事例で詳述する。

## ちえ遅れの子の体育指導 リズム運動

B 5 判 120頁 定価 2,000円 ￥250円

加藤俊子著

ステレオシート2枚つき

リズムに合わせて歩く、走る、あげおろし、屈伸、跳ぶ、ねじる、回旋、ざらす、力を入れる、力を抜く、振るなど基礎的な運動技能を習得させ、子どもの身体的・精神的発達の準備を整え、学習活動へと導く。

## 障害児の娘と保育の仕事と 重い脳性まひの娘をもって保育園をつくった

B 6 判 256頁 定価 1,000円 ￥250円

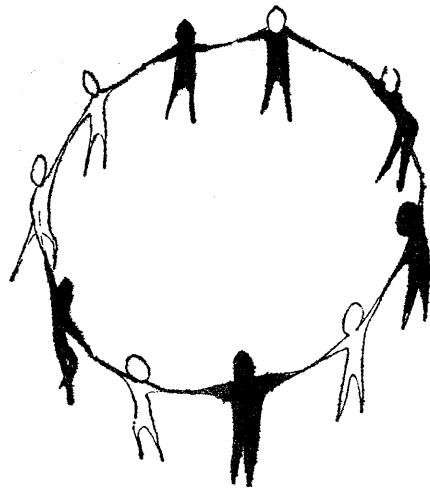
土屋多喜栄著

重症の小児まひ児をもつたひとりの母が絶望のどん底から這い上がり、保育の仕事を通じて生きることの尊さを知った。やさしくも大きくてまじく生きる人間の記録である。障害児指導の関係者ばかりでなく、すべての人に読んでほしい書。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十一卷 第一号

# 幼児の教育 目次

—第八十一卷 一月号—

ほめる教育.....外山滋比古... (4)

ブリューゲルの「子供の遊戯」(4).....森 洋子... (6)

——子供椅子からお粥のかぎませ——ここまで——

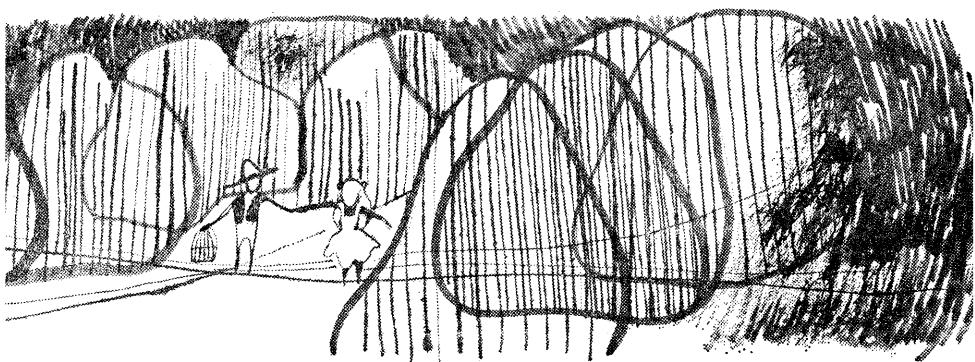
私の保育.....松沢孝博... (18)

赤本「鼠の嫁入」.....森下みさ子... (26)

——子ども絵本に託された想い——

園長室の窓から.....原口純子... (34)

© 1982  
日本幼稚園協会



エリクソンと幼児教育 (7) ..... 仁科弥生 (38)

続・保育の中の小さなこと大切なこと(1) ..... 守永英子 (46)

子どもとの出会いの中で学ぶこと ..... 水沼昭子 (49)

★倉橋賞受賞論文

就学前教育における教材の研究 ..... 秋場美智子 (52)

—絵本の構造分析—

史料紹介

『邦訳 日葡辞書』⑥ ..... (61)

—わが国中世の児童文化史研究によせて—

表紙・うすい・しゅん

表紙題字・比田井和子

カット・福田理恵



# ほめる教育



## 外山滋比古

論して名案の浮ぶはずはないのである。

教育者はいつも何かに対し、うつすらとした不満をもつてゐるのかもしれない。たいてい雲がかかっている。青空のように晴々した心をもつていることはすくない。

人の欠点は目ざとく見つける。そういう頭はいい。ところが、すぐれたところを発見することが下手である。どこか心が冷いからではなかろうか。

教育は叱ることではない。ほめてこそ教育である、といつたことすら知らない人が先生でござい、とやっているのだから、おかしい。教育があまりに些末な技術ばかりに頭をつぶこんだため、肝心なことが見えなくなってしまったのであるうか。

校内暴力などがおこると、先生たちは教科を放つたらかして生徒指導に目の色を変える。心の冷い人たちがあれこれ議

幼稚園には園内暴力がないからと安心していると、後年、あはれ回るような生徒ができてしまうおそれがある。幼児教育が重要であるというのなら、十年先、十五年先におこる問題に対しても責任を感じなくてはなるまい。

子どもはほめなければ伸びない。叱ってばかりではいけない。母親によくそういう話をされるけれども、母親はなつていらない、と思っていることが多い。このごろ、そういう自分に気付いて、愕然とした。母親もほめてやらねば、子どもをほめることのできる自信をもつたお母さんになるわけがない。

そんなことを考えているときに、医師向けの雑誌で、小児科のお医者が反省をこめて書いている文章を読み、共感した。

ある大病院の副院長をしているその小児科医は、こんな風に言うのである。

「母親が育児に自信を失った原因の一端は私たち小児科医にあるのではないでしょうか」

幼稚園でも似たようなことはあるかも知れないが、こうい

う率直なことばはめったに聞かれない。

「小児科医は口を開くと、今のおかあさんは育児が下手になつたと欠点ばかり攻撃し、母原病という新しい言葉もできたほどです」

教育者も先生、お医者さんも先生。どことも先生はよく似てゐるらしい。

「私たちはこどもをしつけるのに、『おかあさん、しかつてはいけません。むしろ、おだてなさい』といつておきながら、母親に対してはほとんどほめずに、その欠点をたたいてばかりいるのが現状であり、これでは小児科医が母親の自信喪失に拍車をかけているといつてもよいと思います」

われわれにも耳の痛いことばである。

「発育の悪いこどもでも、おかあさん、ここがこの前よりよくなっていますよとほめた場合、必ずといってよいほど、次

に相談に来たとき「どもはよくなっています」(阪正和氏「叱るよりほめよ」SCOPE一九八一年六月号)

こちらも大いに教えられた。その後、中学校の同窓会で開業している小児科の医者に久しぶりで会つたから、このはなしをもち出した。

その友人の言には、大きな病院に勤めている医者はうらやましい。われわれのような開業医は、母親からさんざんいためつけられて寿命を縮める。夜中に電話がかかってくる。何ごとかと思うと、

「オシメでカブレたらいいんです。どうしたらいいんでしようか」

などときいてくる。教えるも、お礼にくるのはすくない。起こされた医者は寝そびれる。ついウイスキーを睡眠薬代りにする。それでもストレスがたまつて苦しんでいる。

「そういう母親をほめるのは人間業ではないね」

友人はそういった。現実はきびしいが、それでも、やはり、教育はほめなくてはいけない。

(お茶の水女子大学)



## ブリューゲルの「子供の遊戯」 4

——子供椅子からお粥のかきもせば——

森 洋 子

### 16、子供椅子 Kinderstoel (図1)

ブリューゲルの「子供の遊戯」の最前景の中央左寄りに、座部に穴のある小さな椅子が置かれている。この絵

際には使用されず、子供の遊び道具であったという。とくによく歩けるようになった幼児がその中に入り、厩舎、乾草の納屋、中庭などを座つたまま、動き回ったという。

しかしこれは今日ベルギーでいわれる Kakstoel (おまる) ではないだろうか。一昔前までこの椅子は実際に使用されていた。木製でできていて、底部はなく、穴のがひじょうに少ない。わずかにド・マイヤーが短い説明を加えているだけである。それによると、この「子供椅子」は戦前ではフランドルの農村でまだみかけたが、実に用便をさせたのである。<sup>注2</sup>

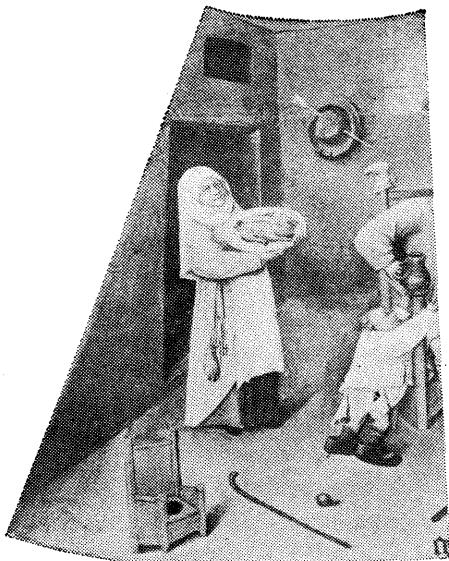


図 2 ヒエロニムス・ボス「大食」  
(「七つの罪源」の部分) 15世紀後半



図 1 ブリューゲル「子供椅子」  
または「おまる」(「子供の遊  
戯」の部分⑯)

ヒエロニムス・ボスの「七つの罪源」(十五世紀後半)の「大食」にも、背もたれのある「子供椅子」Kakstoelが画かれている(図2)。この画面の小さな子供は暴飲暴食の父親に似て、すでにかなりの肥満児である。今まで温かしく子供椅子に座っていた子供が、父親が食事を始めたので椅子から立ち上がり、食物をねだりに行く、という情景が画かれている。

### 17、「いくつもつている」または「奇数か偶数か」 *Zoo veel af, zoveel bij, Paar of unpaar* (図3)

この遊びには二通り知られている。

A、ブリューゲルの絵では、男の子と女の子(ド・マイヤーは一人とも女の子と見ていて<sup>注3</sup>いるが、筆者は右側の青い服の子供はその体格から男の子と考える)が手の中のもの当てっこ遊びをしている。男の子はまや両手を後に隠し、それから左手の中にナツツ、おはじき、小石、どんぐり、豆、桃の種、小銭など堅くて小さいものならなんでもいいが、そのいくつかを隠し、女の子の目の前

に出す。もし、女の子が手の中の数を云い当たたら、それを全部与えなければならない。逆であつたら女の子はその数の分の罰金を払う。

この遊びにはつぎのような歌が知られている。

「ボーテ・ペトーテン、

一番よいナッツがあるところ、

ハハ、あそい、

一番よいお手々を開けさせよう。<sup>注4</sup>



図3 ブリューゲル「いくつもっている」

（「子供の遊び」の部分⑩）

この遊びは季節に関係ないが、ただ隠す対象は桜んぼの季節にはその種、櫻の実の時期にはどんぐりという風に、その時々で一番入手しやすいものが選ばれる。

女の子は手に赤い袋をぶらさげているが、すでにいっぱい詰まっているようだ。男の子は紙の冠をかぶつ正在するが、34番のパンをもつ男の子のそれに似ているため、特定の季節に関係しているのだろう。といふのは同じ冠がブリューゲルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」や月暦画シリーズの「暗い日」にも見出されるからである。後者二点では謝肉祭のときに子供のかぶる「東方三博士」のそれではないかと推論されていて。しかしこの「子供の遊び」でも、それと同じ季節かどうかは断定できない。B、手の中に隠した数ではなく、奇数か偶数かだけを云い当てる遊び。

この遊びの歴史はひじょうに古く、ギリシャ時代ではアリストテレス、アリストファネス、プラトンなどからArtiasmosと、またローマ時代ではホラティウスやオウディエウスから Par impar と呼称されていた。<sup>注4</sup>

十四世紀にオランダのレイデンでひじょうどいの遊びが流行し、おそらく、日本での「丁か半」といった賭博にまで発展したのであろう。ついに一三九七年、同市の半マイル半径内で、サイコロ、トランプ、コインなどを投げてのこの遊びは、法的に禁止されたのである。

ラブレーの『ガルガンテュア物語』の「第二十一章」でも、「丁か半か」「裏か表か」という遊びが列挙されて注6いる。<sup>11</sup>のほかドイツでは *Gerad oder Ungerad* アメリカでも Odd or even などと呼ばれるなど、この遊びは実に世界的な遊戯といえよう。

#### 18、棒馬<sup>12</sup> 11 Stokpaardje (図 4)

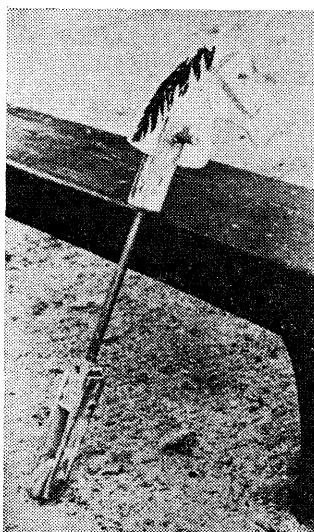


図 5 「棒馬の玩具」  
20世紀の前半、1.82m

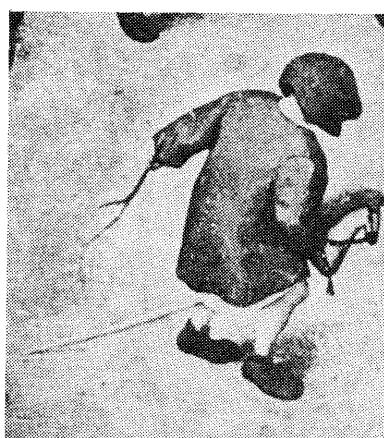


図 4 ブリューゲル「棒馬ごっこ」  
(「子供の遊戯」の部分⑩)

わりに帚の柄や長い火かき棒で遊んだりしたらしい。西欧には中世騎士道の伝統があるだけに、この棒馬ごっこは男の子の人気遊びのひとつだったことは以下に掲げる種々の作例からうなづけよう。

ブリューゲルの銅版画「シント・ヨーリスの縁日」(図6)で、兄妹が一本の棒馬にまたがって広場で遊んで

いる。また同画家の別の銅版画「猿に荒される行商人」



図6 ブリューゲル「棒馬ごっこ」(「シント・ヨーリスの縁日」の部分) 銅版画



図7 ブリューゲル「棒馬ごっこで遊ぶ猿たち」(「猿に荒される行商人」の部分) 銅版画

(図7)をみると、三十四近い猿たちが、昼寝をしている行商人の背負籠から商いの品を取り、勝手に遊び回っている。その中の二匹は棒馬にまたがり、人間の子供を真似して行進している。こうした猿の棒馬遊びは、同時代の画家ピートル・ヴァン・デル・ボルフトの「猿の遊戯」にも見出される(本誌、一九八一年九月号、図12参照)。

中世のドイツ文学の中でも棒馬で遊ぶ少年の気持が歌われている。ミンネジングーのハルトマン・フォン・アウヴェ(一二〇〇年)は貴婦人に対する少年の敬愛をこう記した。

「私が棒の上にまたがったときから、

一生懸命に仕えた女のは、

私に再びやさしい言葉をかけてくれた……<sup>注7</sup>

ヒューゴー・トリムベルク(一三四七年)は子供と遊ぶ老人を揶揄しながらこう歌っている。

「老人が棒の上にまたがる子供たちと一緒にハイドウドウをやつた。

それから丁半ごっこで遊んだ。

子供たちと水浴びに出かけた。

子供たちがお家作りをするのを手伝った。  
二匹の小さなねずみを紐で結び、  
子供たちと少しばかり散歩した。

だから僕らは言つたのさ。『みてごらん、なんて馬

鹿なのだろう。あの老人は注8……』。

なお十六世紀前半にドイツで『太陽の光輝』と題される鍊金術の書が著わされた。本誌に掲げる図版は一五八二年版のものだが、その中で「紅潮した魂の状態」についての全員大ミニアチュール（図8）には、母親の乳を



図8 「紅潮した魂の状態」（『太陽の光輝』より）

1582年 ドイツの写本

ふくむ赤児（この行為は鍊金術で増殖化を意味する）のほかに、幾人かの子供たちが窓から差し込んだ太陽の光のもとで風車、櫻すべり（ただしクリッショングを代用して）とともに棒馬遊びをしているのがみられる。

十六世紀の詩人ジャック・ステラは、とくに棒馬ごっこを他の遊びと区別して「お馬ちゃん」（図9）という詩でこう歌っている。

「どの子供も各々、雀、犬、猫、赤ちゃん人形、お人形で、喜々として遊んでいる。

カートをはいている。ブリューゲルの時代もふくめ、十七世紀オランダでは七才位まで、男の子もスカートをはいていた。いや第二次大戦まで、オランダのある特定の地域、例えば、マルケンやスタポルストでは男の子もスカートをつけていたという。<sup>注11</sup> しかし十七世紀の版画やタイル画にみられるようにスカートをつけても帽子に羽根をついているのは男の子なのである。

同じく十七世紀のオランダの詩人ヤコブ・カッツは、大人の世界での誤謬や愚行を子供の遊戯に準えて教訓詩を書いた（ただしカッツはすべて子供の遊戯をペシミスティックに観っているわけではない）。彼は「棒馬ごっこ」をとくに大人の非現実的な夢のアナロジーとみなし

カートをはいている。ブリューゲルの時代もふくめ、十七世紀オランダでは七才位まで、男の子もスカートをはいていた。いや第二次大戦まで、オランダのある特定の地域、例えば、マルケンやスタポルストでは男の子もスカートをつけていたという。<sup>注11</sup> しかし十七世紀の版画やタ

速歩で駆けるもうひとりの子供は、  
楽しく行進をしながら、  
自分を連んでくれるはずの馬を、  
運んでいる。<sup>注10</sup>

同時代のオランダのタイル画にも、棒馬遊びの子供が画かれているが、その棒馬の頭部には様々なヴァラエティがあることが知られる（図10、11、12、13）。

この遊びは男の子のものだが、タイル画での彼らはス

「棒の上に乗ったり、  
小さな棒切れで棒馬を鞭打つ子供は、  
自分の駆いているのは勇気ある駿馬で、  
フランスの数クローネンに値すると思つていてる。

—— 12 ——



図9 クローディン・ブゾネ・ステラ  
「お馬ごっこ」（シャック・ステラ  
『子供の遊戯と楽しみ』1675年より）銅版画



図11 「棒馬ごっこ」 17世紀中期  
のオランダのタイル



図10 「棒馬ごっこ」 1625年頃  
のオランダのタイル

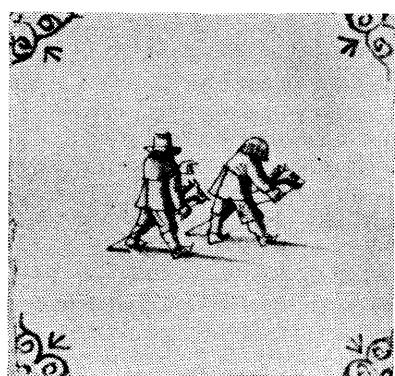


図13 「棒馬ごっこ」 1675年頃の  
オランダのタイル



図12 「棒馬ごっこ」 17世紀中期  
のオランダのタイル



図15 E.シリマン「棒馬ごっこ」(J.カット『結婚について』1642年より)銅版画



図14 「棒馬ごっこ」(J.カット『道徳と  
愛の像』1622年より)銅版画

それはただの木片にすぎない」とがよく分かる。

どんなに多くの人々が棒の上に乗ることだろう。

どんなに多くの人々が丸太の上に座ることだろう。

どんなに多くの人びとが沼地に住むことだらう。

みんなそこが王様の座だと思っている！

多くの人びとは足で歩いているのに、

馬を驅いていると思つてゐる。

彼らの馬、それは高慢という馬なのだ。<sup>註12</sup>

### 19. ハウスKoele-Koele meien (圖16)

二人の年長の子供たち（右は女の子、左が男の子）が手を合わせ、その上に幼い女の子を座らせて運んでいる。二人とも空いている方の手でしっかりと女の子の手を押えている。おそらく体を揺らしながらこう歌い、あわひこやらを歩き回るのである。ゆえにコックとテー  
リングはこれを「ぶらんこ遊び」と呼んでいる。<sup>註13</sup>

「クーレ、クーレ、女の子わやん

小さな子は櫻の木の上に座る、

一、二、三<sup>註14</sup>

またある地域では「小さな教会の中の幼いイエス様」と歌われた。

「この小さい子は塔の上、

わたし達のマリアさまはあそこまで行けない。

わたし達のマリアはあそこまで届かない、

一、二、三……」

なおドイツではイエス様ではなく、「天使運び」Engel-tragen へルツヘンダト) ハリで注目したいのは、この

三人の子供たち

の遊びが、16番

の子供椅子と関

連しているので

はないか、とい

うハイディンク

の指摘である。<sup>註15</sup>

すなわち年長の子供たちは「子



圖16 ブリューゲル「子守ごっこ」(「子供の遊び」の部分⑩)

「おまる」に「これを使い、小さな子を」の「子供椅子」の「おまる」に座らせる様の遊びをしたばかりである、とこう。

## 20、太鼓とたて笛 Trommel en Fluit (図17)

女の子が肩にかけた太鼓を右手で打ち、左手でたて笛を吹いている。ベルトマンレンスはこの太鼓をロンメルポット rommelpot と名づけている。<sup>注16</sup> それは壺の口に豚の膀胱の皮を張り、真中に穴をあけ、棒を出し入れして鳴らすフランドル獨得の民俗楽器である。ブリューゲルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」で前景左の仮面の人物がこの鳴物ではやし立てている。しかし筆者はこの女の子のもつ樂器の形や打ち方から、壺の口に皮を張ったロンメルポットのように思えない。むしろ「猿に荒される行人」(図7)にもみられる普通の太鼓ではないだろうか。たて笛は當時ポピュラーな子供の樂器で、ブリューゲルの銅版画「行商人の手前みそ」(図18)でも、同種類の笛が画かれている。近年アムステルダムで十六世紀

のたて笛が発掘されたが、その写真(図19)はこのブリューゲルの子供のもつたて笛にも近い。

## 21、お粥のかきませじょう Brij roeren (図17)

小さな女の子が道路で見つけた汚物を棒でかきませながら、お粥遊びをしている。ブライというのはフランドル特有のお粥状のブディングで、小さい子供たちにとって、好物のブライのかきませじょうにはまつとも愛好した遊びのひとりのようだつた。しかしJ・ヒルズは、汚物を棒の先につけて友達の鼻の下にもつていき面白がる悪童の遊びと解してゐる。とくにこの情景のすぐ左横に16番の「子供椅子」(ヒルズもこれを Kindertöpfchen と呼んで、「おまる」と見なしている)があることから、この子供は人糞をかきませている、と述べてゐる。ラバーレの列挙した子供の遊戯にも「黄金髪あそび」A la barbe d'oribus という種類があるからであらう。

(続々)



図17 ブリューゲル「太鼓とたて笛」と「お粥のかきまぜごっこ」（「子供の遊び」の部分②②）



図18 ブリューゲル「行商人の手前みそ」銅版画

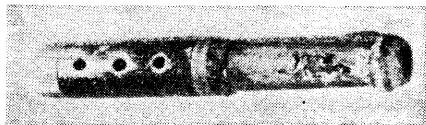


図19 たて笛、木製 16世紀 16.3cm  
アムステルダムで発掘

注一 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verhaald*, Antwerpen 1941, p. 3.

注二 「十種繪子」より、単なる座るだけのものより、便器を

かねてこねておもむじにいして、マニエーの民俗学者

トム・ヘンケンの研究書に詳しく述べ。J. Weyns, *Volkshuisraad in Vlaanderen*, Brussel 1974, p. 384ff.

注三 De Meyere, op. cit., p. 3.

注四 Ibid., p. 3.

歌謡の「ドボード・パード」は原題が Hote patoten であるが、おぞらくトマス・ノートンが因んだ子供の作った擬態語

である。たゞし Patoot (複数は Patoten) は Van Dale の辭書では背の低い肥った醜い婦人という意味であるが、ルジドは前後の関係から、ややした意味を含めたものと見てよい。

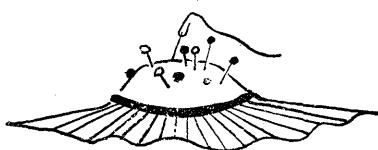
注五 Guts Muths, *Spiele zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes*, Leipzig 1893, S. 381.

注六 Esmangart und E. Johanneau,

- Rabelais, Bd. I, S. 409, Anm. 57.
- 注<sup>1</sup>~ Hartman von Oude, 1200, 譲和<sup>1</sup> F. v. d. Hagen,  
Minnesinger I, S. 328, 60, 1, 4.
- 注<sup>2</sup> Hugo von Trimberg, *Der Reuer*, 1347, 譲和<sup>2</sup> G.  
Ehrismann, Bd. I, S. 111, 11, 2693-2701.
- 注<sup>3</sup> Salomon Trismosin & *Splendor solis*. 太陽の野本  
等 14世紀～15世紀の圖よりハンド本の圖より  
が図鑑は1冊は11年連のものである。
- 注<sup>4</sup> Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris  
1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New  
York 1969), No. 2.
- 注<sup>5</sup> Jan Pluis, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 12.
- 注<sup>6</sup> 韓和の註定→外ヤムニ<sup>6</sup> Jacob Cats, *Kinderspel*,  
Saint-Omer, 1855, "Op Stokje Ryden", pp. 40-43. ヨーロッパ  
の 医師<sup>6</sup> *Huwelyck*, Amsterdam 1625.
- 注<sup>7</sup> A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspel en Kinderlust*  
*in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. IV, S. 317-27.
- 注<sup>8</sup> De Meyer, *op. cit.*, p. 4, "Koele, koelmeiken...." □  
→' ハーネスの圖より<sup>8</sup>
- 注<sup>9</sup> Karl Haidig, *Das Spielbild Pieter Bruegels*, Berlin 19  
37, S. 63. ヨーロッパの圖より<sup>9</sup>

注<sup>10</sup> G. Hartmann en E. Lens, *Heil Joh!*, Amsterdam 1976,  
p. 46.

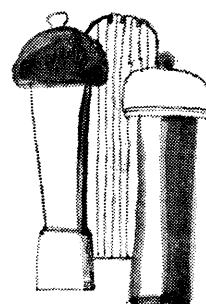
注<sup>11</sup> Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspiele 1560*, Wien  
1957, pp. 21-22.  
(東洋大百科)



## 私 の 保 育

——そこに「フーガ」を見る——

松 沢 孝 博

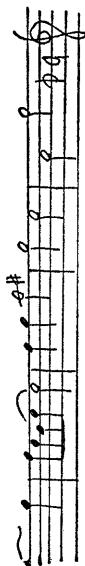


一人の保育者として子ども達との付き合いを考える時、同僚が子ども達と接している様子や、実習生が新鮮な感覚で子ども達と過ごしている姿、又、保育後の彼等との話し合いは、私に色々な教えや励みを与えてくれる。それらを通してよく感ずる事は、保育という子ども達との付き合いの中に「フーガ」的因素があるのでないかと、いうことである。それは、ここで述べができる程明確にとらえられているわけではなく、どちらかといふ

と“感じている”ぐらいに過ぎないものだ。けれども、時に私が子どもとの付き合いに、どうしたらよいか困っている時など、保育が「フーガ」として流れしていくのはどうすべきかと、考えたりする事が少しの手振りになることもある。また同僚が、子どもと遊んでいるその時の様子を見て、「あつ『フーガ』だ！」と感ずることもある。ここでは、ある時期を過ごす子どもの経過を「フーガ」的に追ってみたいと思う。

さて、「フーガ」ということだが、「トッカータとフーガ・ニ短調」「フーガの技法」等、「フーガ」という題名のついた曲もあるが、「フーガ」とは、"ひとつの主題が各声部あるいは各楽器に定期的な規則的な模倣反復を行いつつ、特定な調的法則を守って成る楽曲である。すなわち、声楽合唱曲あるいは器楽合奏曲や管弦楽曲であり、あるいは、声楽と器楽を合わせた楽曲ともなるのであり、あらゆる対位法的技法を含んで展開するが、調的にひとつの一調を基盤にして、その近親調がその原調を修飾しながら、大きな調的終止形を形成するものである"（音楽辞典 一九七七 音楽之友社）

例えば



これは、有名なバッハによる「フーガの技法」の始めのテーマである。これが旋律的にもリズム的にみても様々に変形されて現われてくるのだが、基本的な輪郭は失

われることなく、自由に音楽的に展開していくのである。

ところで、ここに登場するA君のことについて少し述べておきたいと思う。

A君は、三才児として私達の所へ入園し、入園当初は、表情はニコニコとしていて良いのだが、母親や人にとつて気にくわない事があると、自ら頭を物や床にぶつけたり、体全体で跳びはねて時に痛々しさも感じられる程であった。特に保育者がA君にとって良いと思って誘いをかけた事でも、ことごとく頭をぶつける行為として返ってきた。時には、名前を呼んだだけでも、その様な動きをすることがあった。A君は泣いたりする時の発声はあるけれども、発語はない。けれども表情が良いので、とかく大人は言葉で働きかけがちになり、機嫌をそこねることが多かったようだ。

このA君との経過を、「フーガ」の旋律的要素である"主題" "応答" "対主題" を用いて追つていきたいと思

う。

## 一曲目

### 『主題』——ニコニコしてよく遊ぶ

けれどもそれは、保育者や母親、まして他の子どもに興味を示さず一人で動き廻っている。特にA君は、簍の子の上を行ったり来たり、その上をとびはねたり、又たとえ、すべり台がぬれて登りにくくても、すべり台を下から登つて上まで行き、登った時の格好のまま降りるという事を繰り返している。そして、水溜まりや、水場では足で水をはねかせて、声を出して遊んでいる。

### 『応答』——A君と距離を置いて見守る

私が一緒にすべり台に登ろうとして、A君との距離を近づけたりすると、私を手で押しのけたり、声を掛けたりすると自ら頭を床に叩きつけたりする、又A君が登園する前に私がすべり台の踊り場で迎えようとすると、すべり台に登つてこなかつたり、表情をくずすので、私は

地上でA君を見守ることがほとんどである。ただ私はA君と距離を置いて動かざるを得ないことが多いが、A君が場所を離れた後私自身、同じ遊び（動き方）をして、彼の気持ちに近づいてみたいとも思う。

### 『対主題』——初めてのトランポリン

退園時刻直前、トランポリンによりかかつてそれを手で叩いている。そして右足をへりに掛けようと何度も上げるのだが届かない。近くでそれを見ていた私は、A君ひとりではとても無理なので少し手伝ってトランポリンの上に彼を乗せた。全くぎごちないが、大変ニコニコして跳び続けた。

## 二曲目

### 『主題』——母親を呼ぶ

登園してすぐ、すべり台に登り踊り場を往復していく。この頃は下から名前を呼ぶと、振り返つたりする。又トランポリンによく乗るがその時には私は彼に手を引かれる。動いている時は、ニコニコしているのだが理由

が判らず泣き出しがでてくる。私は慰めるつもりでA君を抱く。それ 자체は拒否されない。少しすると落ち着き、自ら降りる。遊び出すのかなと思うと地面に泣き伏してしまう。私達にはA君がどうして泣くのか理由が見つからなかつた。

#### 『応答』——母親に入室してもらう

ひょっとしたら母親を彼は必要としているのではないかと思う。そう感じた翌日、風邪気味ということもあり、A君の視界から母親が見えなくなると泣き出した。

母親を呼ぶと彼は母親に抱きつきその腕の中でシクシクやつていて。そこで、母親にA君が自分から遊び出す迄、一緒に過してもらうよう伝える。母親は心よく受けてくれる。

#### 『対主題』——何が何でもお母さん

比較的早い時間で落ち着くと母親の手を取りトランボリンへ行く。母親の手を取りながら、トランボリンを跳ぶ。だんだん上手になつたこともあって少し飛び過ぎてころび、口を少しきつて泣くとすぐに、母親の所へ行

く。その他、遊びの移動の時も母親の手をとり、私や他の保育者には目もくれないが、母親といふ時はニコニコとしている。

### 三曲四

#### 『主題』——母親にベッタリくつづいてる

時に一人ですべり台に登りに行くこともあるが、母親を絶えず見ている様子で、それ以外は母親にベッタリ抱きついている事が多い。

#### 『応答』——母親とゆっくり過ごす

私達は、A君が当初母親に全く関心を示さずに動きまわっていたところ、やつと母親を意識し始めた様子なので、じつくり母親の元で過す事を勧める。母親は積極的に受けて下さり、A君のペースに合わせ過ごす。

#### 『対主題』——母親から少し離れることがある

例えば、午前中母親にベッタリ抱かれていると、その後、自ら降りて動き出す。しかし他児に邪魔されたり、何か気に入らない事があると、確実に母親の元に行く。

## 四曲目

### 『主題』——母親と一緒に遊ぶ

よく母親の手を引きトランポリンへ行き、トランポリンに乗せてもらつて母親の手を取りながら跳んだり、母親に抱かれながら跳ぶ。母親から離れることがあるが、よく母親の方を見ている。側に、私や他の保育者がいても必ず母親の手を引く。時に、母親が他児に手を引かれてA君の視界から消えると激しく泣き出す。

### 『応答』——母親と私がA君を見守る

他児がA君の母親の手を引きにきても、私や他の保育者がその子の相手をするという事で、母親にはA君だけを見て、いつでもA君が呼びに来ても応えられるようにしてもらう。

### 『対主題』——ちょっと母親に用事

ほとんど玩具を持って遊ぶことがなかつたが、プラレールを持つたり、風船をいじつたりする。ある時、すべり台の踊り場で一緒に下を見ていたが、

すべり台を例の如く後ろ向きに降りていった。いつもの様に私は戻つてくるだらうと待つていたが戻つて来ないので、私もすべり台を降りて部屋に入った。すると母親がA君に水をのませ終つていたところだった。"A君が部屋に入つてくるなり、母親の手を取り、水場に引つぱつて行つた"ということだった。A君は水を飲むと一人で再び外へ出て行った。

又母親の手も引くが、母親と一緒に私や他の保育者の手も引くことがみられるようになる。

## 五曲目

### 『主題』——母親が自分が動きまわる空間にいれば、視界に入らなくとも私や他の保育者と一緒に遊ぶ。

母親との距離が離れ、時に登園時、私が座つて手を広げて名前を呼ぶと私の腕の中に飛び込んでくる。そして私の手を取り、トランポリンをする。一人で遊んでいる時も近くで見守つていると、よく私の方を見て笑いかけてくる。

『応答』——母親は、いる

母親には、まだ母親を確認する為にA君が戻ってくることがあるかもしれないのに、同じ場所に止まつていてもらうようにする。私の方は、他児の事は他の保育者に全てまかせて、いつでもA君の要求に応えられる様、側にいる。そして一人で遊んでいる時でも、よく私の方を見たり、笑つたりする事があるのでその時は必ず笑いかける。

『対主題』——ちょっと母親確認

一番母親から遠い裏庭へ行き、すべり台やコンクリートドームの上に乗つて踊つたり、色々な方向を見ていい。そこで私と葉っぱのやりとりをしたりする。時に私が玩具を見せて足元に置く。以前だと、すぐぐずつたり激しく泣いたりしたが、それらを受け取つたり、足で押し出したりしている。ある時、唐突的にその場を離れたので、どうしたのかなと思い後を付いて行く。すると母親が見える所まで行つて、母親の方をチラッと見て再び元の場所へ戻つて来た。又時には、他児に遊びを邪魔さ

れてぐずるが、側にいる私に抱かれにきたりもする。しばらく私の腕の中で抱かれていると自分から降りてニコニコして遊び出す。

#### 六曲目

『主題』——A君が遊びまわる空間に母親がいなくても、私や他の保育者と遊ぶ。

登園時、母親に抱かれて来るが私が手を広げて迎えると、すぐ母親から私の方へ体を預けて抱かれに入る。私は抱かれながら、私の顔を見て笑つたり、両手で私の胸を叩いて声を出して笑つたりする。しばらく抱かれた後自分で降り、一人ですべり台に登りに行つたり、私の手を引いて裏庭へ行つたりする。そして私の手を引かないう時でも、時々後ろを振り返つて見たり、笑いかける。

今迄、一人で動きまわっていたすべり台、トランポリン、水場でも私を意識している。例えば、裏庭のすべり台の上で私の方を見ている。大きな木の葉が風に揺れて時々私の方も彼の視界から消えてしまう。すると、A君

は体を様々にずらして、私の方を何度も見る。退園時まで、母親を探す様子は全く見られず、私には、A君と一緒に過ごしている、という実感が強く感じられた。ある時、たまたま私の所から少し離れてA君は水遊びをしていた。その時、他児が私の所に抱っこをされに来た。私がその子を抱くのを見て、A君は私の所へ寄ってきて、その子の腕を何度も引いた。

『応答』——母親は待合室へ

もう私や他の保育者と一緒に過ごせるようになつたので、母親には他の母親達と同様、待合室で退園時までいてもらうことにする。私の方は、母親にペッタリしなくなつたので私の方にペッタリしてくる可能性も考えて、いつでも応えられるようにする。確かに、A君との距離が近くなり、抱っこやおんぶが多くなる。私の方も一つの事を長時間していると体が痛くなるので、肩車をしたり、抱き方を変えてみたりする。

『対主題』——他児への関心も？ いつもニコニコして遊

ぶ。

私は抱かれてトランポリンをすることが多く、私が渡してA君を降ろそうとするとき泣きはしないが足をバタつかせる。私があきらめて、むしろ積極的に付き合うと、声を出して笑い、そのうち自ら降りていく。そして今度は、他児がすでに遊んでいるシャワー室へ自分から入っていき、水をはねかせながら、他児とジョーロを取り合ったり、取つたりしている。それでもニコニコしている。またA君に興味がある六才の女の子が、A君を抱こうとしたり、構おうとしても、笑うだけでくずれることはない。私や他の保育者との距離も近くなつたが、他児との距離もずっと近くなつてくる。ある時、私が、土の山に水を入れようと穴を掘っていた。一応掘り終つたのでスコップを置くと、それを見ていたA君は口では表現しないが、もっと掘れという様に私が置いたスコップを取り上げ私に渡す。私はもう少し穴を掘つた。A君は、発語はなくても、要求を上手に示すことができるようになり、確実に人とのつながりの中で動けるようになつて、いろいろな事を私は確信した。

おわりに

一曲、一曲の過した時間の長さは異なるし、それぞれの時期のテーマも少しずつ異なっているが、A君が成長しているという一つの大きな流れの中で、各テーマが次第に変化し、発展していくのではないだろうか。

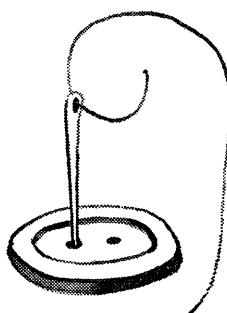
とは言つても、子どもの成長は同じ方向、角度、質をもつて進むとは限らない。

しかし、私がA君と過した後を振り返る時、すぐ「フーガ」としてのイメージが湧いてきた。つまり、私も、A君も、心はそれぞれ独自性を持つて動いているが、A君は、誰からのものではない。"テーマ"を自ら示し、必然的に保育者である私達がそれに応え、またそれにA君が応えていく。この様子は、私にとって、まさに「フガ」であった。

A君と私や、他の保育者達とが、良い「フガ」の曲を楽しく演奏できたのであらうか、私にもっと良い応答

ができたのなら、もっともっと素晴らしい対主題から、次の主題へと、A君は発展させていったのではないだろうか。等々、振り返りつつ、これからのがA君の過し方についても、一つの手掛けとして、より良い「フガ」の曲を創り上げるには、私達がどう具体的に応答したらよいか、考えていくであらう。また、一つの保育発展の手掛けとしても。

(愛育養護学校幼稚部)



## 赤本「鼠の嫁入」

—子ども絵本に託された想い—

森下みさ子

日本における子ども絵本は「鼠」に始まる。

京都中心に営まれていた出版業が江戸に移り始めた、江戸は延宝（一六七四）の頃、絵入淨瑠璃本の一種として江戸で生まれた「金平本<sup>\*1</sup><sup>\*2</sup>」や、京都に誕生した贅沢な趣向の「行成表紙本」等が下地となつて、ゆっくりと

手頃な値段で子ども等に渡り、愛され、後に子ども絵本の様式を確立する「赤本」の確かな先駆けとなつた。

このようないちども絵本の胎生及び誕生の時期に、「鼠の嫁入」「鼠年中行事」「鼠の耕作」「たからねずみ」等、鼠が大変親しくとりあげられている。とりわけ、「鼠の産声をあげる「赤小本」がそれにあたる。明暦の大火（一六五七）以後すたれてゆく「金平本」や、高価き故嫁入」は、行成表紙本・赤小本・赤本を通してみられ、

子ども絵本のはじまりとの密接な関わりを告げている。

また、それとどまらず、やや大人向きに趣向を変え、黒本・青本・黄表紙へと繋がっており、子ども向けの財を契機として、江戸を通じて好まれた題材であったと思われる。

私は、ここで、子ども絵本の先駆けとなつた絵本「鼠の嫁入」をとりあげ、当時の人々の、子ども及び子ども絵本によせた想いに光をあててみたいと思う。

### ◆赤本『鼠の嫁入』

浅倉無聲氏の労による『日本小説年表』及び近世文学研究者小池藤五郎氏の記録によれば、明暦から延宝（一六五五～一六七四）にかけて、行成表紙本或いは赤小本の『鼠の嫁入』が生まれていたことになる。が、子ども等にこそいつくしまれたものだけに保存されることも珍しく、加えて戦禍に巻き込まれるなどしたため、今は所存不明である。従つて、現存する最も古い『鼠の嫁入』は、国会図書館貴重資料室に大切に納められている、初期の赤本であろう。

丹砂の赤が黒ずんだ茱萸色になつた、虫の跡も痛々しい扉。しかし内には、それらを眺めては夢をつむいだであります。とおい昔の子ども等の声が聞こえてくるような、賑やかな鼠どもの世界がある。

『鼠の嫁入』といえば、今日、太陽、雲、風、壁、鼠とめぐる、鼠の婚嫁を想い浮かべる人が多いと思われます。が、赤本の『鼠の嫁入』は物語に従つて展開するわけではなく、鼠の世界の婚礼前後の、賑やかな悦びに満ちた場面が綴られて一冊となつてゐる。(→) そうち(二)結納 (三)その接待 (四)化粧・着物の支度 (五)台所 (六)(+)嫁入行列 (七)結婚式 (八)出産 (九)宮参り の十三の場面がおさめられてゐるのだ。そこには、主人公もなければ、画面の中に焦点となるしもなく、物語の展開もなければ、もちろんヤマ場も用意されていない。門の外を掃く者、打水をする者、布を裁つ者、畳む者、御歯黒をつける者、髪を結う者、タコを洗う者、膳を運ぶ

者、等々、様々なかつこうの鼠たち。また、金銀、真綿、諸白等の結納の品々、魚、鳥、すりばち、かまと等の台所の材料や用具、そして鼠たちの行列が延々と運んでくる、嫁入道具のあれこれ……。場面場面に「嫁入」にちなんで、人（風）や物が様々に混在して描かれている。



こうした特徴は、同じく赤本の『ねづみの縁組』（享保年間、西村重信画）に、そつくりあてはまる。さらに、青本・黒本・黄表紙の『鼠の嫁入』と比べてみると、その特徴はよりいっそう明らかになろう。これらやや大人向けに移った絵本では、嫁入支度や出産の場面がつづられていることに変わりはないが、白鼠の福五郎と初かという固有名詞が与えられていたり、詞書の中で状況の設定や物語の展開が語られていたりする。大人を意識したときには、自ずと描写される、これら場面の状況や流れが、赤本では問題とされず、ただひたすら、人や物やことばの賑わいの中に、「嫁入」のめでたさが表われている。赤本『鼠の嫁入』には、何がどう語

る。鼠たちの発することばも、会話として繋がっているものではなく、それぞれのしぐさに応じて、一人言のように付されている。

に、そつとおくれたにちがいない。

### ◆「鼠の里」への幻想

ところで、そのような宝箱の住み人が、狐でも狸でも、大猫でも、人でもなく、なぜ「鼠」であったのか。次に人々が、「鼠の世界」に幻視したものに目を向けてみることにする。



(『ねづみのえんくみ』 西村重信画より)

られるかという「内容」ではなく、悦びあふれる幸福な「霧雨氣」こそが描き出されている、といえようか。

女性の生における、祝祭に満ちた至福のひととき。そのありさまが、「鼠の世界」に託され、いたいけな女子の手の内に、祈りと悦びのこもった、小さな宝箱のよう

は、鼠の穴が外敵から守られた安全な空間として機能し、また鼠は大切なものをもたらす存在として登場している。そして、『古事記』にあらわれた、この「鼠の世界」と「鼠」に関する特性は、民話・伝承・土俗的な信仰の類にも、色濃く伝えられていると思われる。

たとえば、ほとんど全国隅なく語り継がれてきた「鼠の淨土」は、餅つき（小判つきの場合もある）に興じる祝祭的な空間、天敵の猫から守られたウロ状の安全な空間、そして帰りには宝や富が授けられる空間、として「鼠の穴」を描き出す。また、「鼠の隠れ里」の伝承は、



信じたものも多い。

常日頃は、穀物を荒し、大事な米を盗み、柱や壁に穴をあける、厄介もの。しかし、人々は、人に飼い慣らされることのない力のかけに、穀物や米や、ひいてはそれらを糧として営まれる「家」を守る靈的な力をも重ね見たのである。また、富裕な家の米倉には鼠が棲みつく、という事実を裏返せば、鼠の居る家こそ富を約束された家である、という逆説もなりたとう。人々は、鼠が穀物や米や家を荒すが故に、それらを司る力を秘めた存在とみなしたのであ

鼠の里の餅つきの音を耳にすると富み栄えるとか、そこを訪れると宝を与えるとか、といふ伝えている。さらには、大黒天の使いとなつて、福や富を運びくる白鼠の話、鼠の居る家は富貴の相があるとするいい習わし、鼠に尊称を用い餅を供えて、その害の及ばぬこと、その年に豊作であることを祈る風習等、鼠に靈力を信じたものも多い。

る。

そこには、「鼠の世界」をこそ、食に満ち足りた理想郷として想い描く氣持があつた。全国各地に伝わる「鼠の淨土・隠れ里」には、そうした人々の幻想と夢がこめられている。小さな入口によつて外敵の侵入を許さない。



(『ねづみのえんくみ』 西村重信画より)

い、大地のぬくもりのたちこめた空間、そこに賑やかにくり広げられる餅つき……、安全と暖かさと満ち足りた糧が、鼠たちの小さな世界にゆだねられたのだった。それは、決して輝かしい大きな夢ではありえない。けれども、日々の暮らしに不安を抱きながらも、わずかなぬくもりと食糧を糧として生きる人々にとっては、この上なく暖かい幸せに満ちた夢の幻郷であつたろう。

「鼠の世界」だけでなく、人々は、身近に住まう、この小さな生き物の動きにも、特別な気持を抱いていたと思われる。人の寝静まった夜中、走りまわるかすかな音を耳にし、壁の穴からのぞいたちいさな顔や、家の片すみに見え隠れする姿を目にしたとき、正体は鼠とわかつての姿をみた、としても不思議ではない。姿なくかすかに氣配だけをおくつてよこすもの、内と外をすばやく行き

来るもの、思わぬところから現われかき消えるものとして、鼠は、幸運をもたらす福の神の使者となり得たのである。

### ◆『鼠の嫁入』に託されたもの

長い年月育まってきた、鼠及びその世界に付託されたイメージを垣間見ると、絵本『鼠の嫁入』によせられた想いも、ひとしおの強さを持って迫ってくるように思う。

赤本の大きさは、赤小本よりやや大きいだけの、縦五寸四分横三寸九分五厘（ $16 \cdot 6 \times 13 \cdot 1$  cm）。そのわずかな空間に、できるかぎりの悦びと願いをこめるのに、人々の想像力は、長い歴史の中から自ずと「鼠の小世界」を選びとったのである。そこは、小さいながら、豊かで満ち足りた空間であつたから。そして、この小動物は、小ささと活発さ故に、福をもたらす神の使いでもあつたから。

さて、ここでさらに触れておきたいことがある。秋田、岩手、宮城、長野等、非常に多くの地域に、正月に限って、鼠を「オフク」とか「ヨメゴ」と呼び、餅を供えるという習わしがある。鼠が、実際はいたずらな厄介者であるにも関わらず、靈的な力を付与されてきたことは既に述べたが、その聖性を最も露わにするのが、「正月」という常ならぬ時なのであった。新しい時の光を浴びて、鼠は、一年間の「家」の安全と穀物の豊作を祈願される精霊へと変幻する。また、賑やかな餅つきがくり広げられる「鼠の里」も、新年の様相である。これらのことから「鼠の聖性や祝祭性」は、正月、すなわち一年のはじまりの時と切つても切れない縁があると思われる。加えて、鼠算式に増えるといふたとえにあるように、鼠は「多産」と結びついていた。先に紹介したように、『鼠の嫁入』は、最後に「出産」「宮参り」の場面を付している。「嫁入」で切れずにこの場面まで描いたところ、当時の人々の、鼠の多産傾向に付託した祈りを読みとることができるのではないだろうか。

昨年、本誌に連載された鬼頭氏の歴史人口学の考察によれば、当時、出産に伴う危険性は殊の外高く、また無事に生まれたにせよ、その子の誕生を悦び育てるだけの条件が用意されていた、とはいひ難い。そんな状況にあって、子どもが無事に生まれ、育ち始めるということは、やはり「鼠」に託した、人々の切なるのぞみであつたと思われる。子孫の繁栄を願う心と、この世に生を受けた子どもへの祈りが、この小本にこめられているのである。

一さつの絵本の中にも、人々が長い年月、くり返し想い描いてきた夢や、現実に対する願いが、あふれている。『鼠の嫁入』に私がみたのは、小動物に託された、明るくおおらかな夢であり願いであった。

ところで、この本が生まれてから、子どものための本は、年の初春、すなわち新年に、子ども等に手渡される習わしができたという。鼠が正月と結びつくことは既に述べたが、子ども等は、やはり新しい時を迎えて、その

祝祭に満ちた小世界を贈られることになったのである。年のはじめ、子ども等に授けられる、赤い表紙の愛らしい絵本。子どもの小さな手に、それにふさわしいほどに小さな「鼠の世界」をおくり届け、人々は何を想つたのだろう。鼠の里に幻郷をみたように、そしてまた鼠に精靈の姿をだぶらせたように、子ども等の世界に、そんなささやかな夢を見、願いを託したのではないだろうか。新年を祝い、一年の豊かな営みをこい願う人々にとって、子どもは、新しい時を活き活きと紡ぎだす、この上なく悦ばしいもの、とうつったのである。

二百年もの歳月を経て、今日に残された絵本が、子ども等によせられた暖かな想いを証し、そこにゆだねられた夢を語っているように思われてならないのだ。

\*<sup>1</sup> 坂田金平を主人公とする講談本類の娯楽本。明暦から寛文（一六五五～一六七三）にかけて流行、挿絵入りの半紙本で絵草子のき

\*<sup>2</sup> 名書家藤原行成の著わした歌書にならい、丹砂の赤の表紙に雲母で紗綾形・龜甲・牡丹鶴等を型どった美しい本。

## 幼小関連

原口純子

ず、毎日先生にしかられたり、立たされたり、廊下に出されたりしている様子が園の方に聞えてくる。

急速に小学校へと向う、担任の別れがたい気持をよそに「小学生」へのあこがれがつのる。どの子もたし算やひらがなや漢字などを早く学びたい、勉強をしたい気持でいっぱいになっている。

こうして出ていった子どもたちが五月連休も明けてしばらくたつと、大半の子どもたちはそれなりに小学校の生活に順応していくのであるが、何人かの子どもたちは、拘束の多い学校の授業に耐えられ

応がある、一つは子どもが伸び伸びとすごした二年間の園生活を肯定して、子どもを受け入れる側の小

学校に授業の内容や方法についてもう少し工夫や配慮を求める声である。もう一つは、幼稚園に、もつと学校の授業のような一斉保育を求める声である。

六月の半ばに進学先の小学校の一年の担任の先生

と、送り出した側の園とで話し合いをしてみると、「四月当初お宅の園から来た子どもたちは始業のベルが鳴つても砂場に入り込んだまま部屋に帰つて来ず困りました。授業といつてもあきてくると椅子を立つて歩いて、勝手なことをする子などいましてね」と年配の女の先生がひどく遠慮がちに、言葉の裏側に十倍ぐらいの非難と困惑をかくしながらおっしゃる。なるほど、幼稚園では四十五分きざみではなかつたし、ベルなども鳴らさないから、ベルが鳴つたら出たり入つたりするようにも指導してはいいない、したがつてたとえベルが鳴ろうとも、それが自身の行動を規制する音とは知らなかつたかも知れない。また園生活の中で、人の話しを聞く態度についてはかなり熱心に指導して來たつもりではあっても、興味のない話を四十五分間聞きつづけるまでには育つていらないであろう。

幼稚園で元気のよい遊び上手だった男の子が、小学校の生活システムに乗りきれず、親も子も悩み、

幼稚園ではどちらかというとひどく消極的で、いわれていたことだけをしていたような子が、先生のいい子になって生き生きしている姿を見ると、幼稚園で一生懸命育てていることと、小学校の期待しているものとの間に大きなずれがあり、送る側として悩まざるを得ない。あんなに元気いっぱいだった子どもたちが、すっかりシオシオとしているのを見ると耐え難くむなしい。しかられたり、しつけられたりして、六月下旬には、はみ出していた子どもたちもたいてい小学校の生活に順応していくのである。

幼小の関連の問題は、文字を就学前にどの程度おぼえているか、とか、生活習慣の自立とか、朝顔を幼稚園で植えるのはよいが、観察は小学校の理科で、とかいった事柄ではなく、基本的な教育観の違いにあることを強く認識しなければならない。

従来幼小の関連と、幼稚園教育を就学前教育としてとらえ、現行の小学校の教育システムを前提として、しつけに重点がおかれて（おとなしく机

について長い間同一作業ができる）ていた、言わば幼児教育そのものが小学校に従属していたし、その時代においては幼小の関連はほとんど問題はなかつたのである。教える内容が折紙や遊戲から図工や体育に変わって、自由遊びの時間が短かくなつただけで、先生の指示や号令に従つて子どもが動くというシステムには変化がなかつたのだから。

しかしここ五年ほど、幼稚園が幼児教育のあり方に疑問を感じ、目覚めた時から（もつとも大正時代から目覚めていた人々もたくさんいたが）幼小の関連を工夫せよ、と幼稚園の課題として与えられて來た。

すなわち、六領域をあたかも教科のごとく取扱い一方的に教えていた保育から大きく転換をはかり、自主性や自発活動、自己充実などが強調され、決つた活動を一方的に与えず、子ども自らが取り組む活動が重視されるようになつた。指導法においても児の興味や関心に基づく指導で、幼児に拘束感を与

えないように配慮し、個人差に応じた指導を行い、内容においても生活経験に即した総合的な指導を行うようすすめられている。

これは幼児教育のあり方として正に正論である。

しかし、園がその方向に努力すればする程小学校の現行の教育方法とかみ合わないものとなる。幼稚園で育てる自主性や主体性と小学校での自主的学習態度や主体的学習態度との間にひらきが大きすぎるのである。

さて、県の出す指導方針では「——小学校低学年<sup>注1</sup>教育との関係について十分理解を持つことが幼児教育をすすめる上で重要なことである」としている。

現行の小学校一年生の一学期の授業を考えると、園としては今年も三学期になると、もう少し一齊課題活動を増やして、少しでもギャップをうめておこうと、幼小関連をおもんぱかるのである。

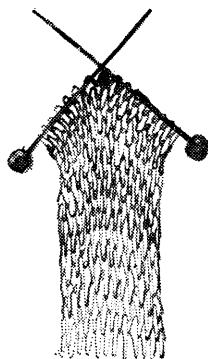
もしも小学校の教育の方でも、今ある子どもの実態からスタートする方向に今一步步み寄るなら、幼

小の関連の問題は解決されよう。そのためには、一年一学期の授業の方法、一時間の区切り方、内容の運び方にも工夫が今一つ加えられてしかるべきであろう。今すすめられつつある百科教育の内容に注目したい。

幼小関連の問題は一方的に送り手の問題におしつけるべきではなく、迎える側の課題ととらえる視点がもつと重視されてしかるべきではないであろうか。

注1

昭和56年度学校教育指導方針 P23 茨城県



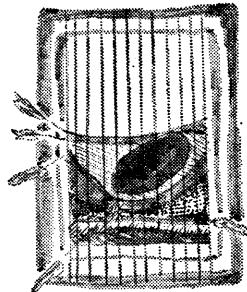
☆園長先生

夏休みにヘルニアの手術をしたM子ちゃんのようすを母親から聞いたところによれば、大きい病院なので手術の前の検査・準備などがいろいろとあったらしい。だんだんと痛いのと恐怖心とが増してきて手術の前には、「いやだ、いやだ」と大騒ぎだったらしい。母親や担当の医師が一生懸命なだめて、「大丈夫よ、病院で一番えらい教授の先生が上手に痛くないようにやって下さるから」と言つたら、M子は大声で泣きながら「ウソー、一番えらいのは園長先生にきまっているわよ」 (K)

☆神様のいらっしゃるところ

日々、つくづく子どもの発想はユニークだと感心してしまう。K子がとても真剣な顔をして話してくれる。「神様は朝はいらっしゃらないのよね。だって神様はお月様にいるのよ。太陽だったら熱くて死んでしまうでしょ。だから神様はお月様にいらっしゃるのよ。だから『神様おねがいします』って言うのは、夜するものなのね。」 (K)

# エリクソンと幼児教育 (7)



仁科 弥生

## 三、移動と性器期（その三）

子どもの道徳性の発達についてエリクソンはどのよう  
にとらえているのであろうか。それをさぐるのが今回と  
次回のテーマである。

われわれ動物は「本能」をもっているという。その意味は、下等動物は、生態系の一部をなして生存を確保してきており、周囲の環境と相互作用をするために必要な比較的生得的で、比較的発生の初期からすぐに役立つ手段をもつてているということである。その相互作用の型は種によつて大きく異なるが、一つ一つの種に関しては、それはきわめて融通性に乏しい。つまり下等動物は殆ど学習することができないのである。一方、高等動物には本能の分化が観察されるが、エリクソンは、それを、子どもの側の本能的に接触を求める行動と親の側の本能的に接触を与える行動との相互調節としてとらえることができるという。たとえば、ある種の哺乳動物は母親に肛門

をなめてもらつてはじめて排泄することを学ぶように、親の与える接触が子どもの能力をリリースし、適応機能の働きを完全なものにするのである。では人間の場合はどうであろうか。赤坊の欲求の多くは本能ではない。その母親の補完的な欲求も本質的には完全に本能的であるとはいえない。そのいざれにも、自己保存の能力や環境に対する相互作用の型は内在していない。エリクソンは、人間の「生得的本能」は衝動の断片であって、文化の伝統と道徳意識がそれらを組織しなければならないと考へている。そして、それらは長く引き延ばされた児童期を通じて、その文化特有のしつけや学校教育によって組立てられ、意味を与えられ、組織化していくといふ。

ところで、エリクソンは一九三七年に、文化人類学者スカダ・メキールの協力を得て、サウス・ダコタのスー族の幼児教育について現地調査を行なっている。それぞれの文化によつて異なる育児観や児童訓練は、長い文化的伝統や、社会的、経済的条件を基盤として形づくられている。彼は、未開社会では、経済機構が比較的単純で

あり、変数が少なく、それらの原型的なものを見ることができるとして、アメリカ・インディアンを選んだのであつた。そして、それは、幼児期という普遍的な事象が特定の社会によってどのように影響をうけるか、またそのような文化的要因がいかにパーソナリティ形成に關係するかを分析解明しようとした彼の研究のはじまりであった。ここでは、その資料から、スー族の幼児期とその部族の道徳的理想との間にどのような収斂現象が見いだされ、またそれをエリクソンがどのように分析したかを紹介しようと思う。

スー族の生活では寛容であることが特に目立つ徳目として要求されていること、そして寛容性の徳目を養う最初の基礎を母親の無制限の授乳を享受する乳児の特権においていたことはすでに述べた。では幼児や児童の場合はどのように扱われていたのであろうか。たとえば、インディアン特別保留地の学校に、まるで村八分にされておいていたことはすでに述べた。では幼児や児童の場合はどのように孤立していたのであろうか。たとえば、いるかのように孤立した一人の少年がいた。それは、その少年の父親が近い町の銀行に預金をもつていたという

理由からであったという。この一例が示すように、スー族の世界では、「金錢を自分だけのものにしておく者」という悪人呼ばわりを一旦受けると、彼や彼の家族は裏切り者として社会的に葬られてしまうのである。これは、スー族の経済の大原則の一つ、寛容性に反するからである。スー族の社会では、富の均等化の原則の最上の表現は「人に物をやってしまうこと」であった。友だちや親戚の者を招いて宴を張り、主人はもつている物をすべて客に振舞つてしまふのである。今日でも、インディアンの儀式的な行事があると、親たちがそのような時のために貯えてきたわずかな品物や小銭を全部、子どもが他人に施してしまふところを人々は目撃することがある。また、スー族の親たちは、訪問者が彼らの道具や宝物を賞賛するようなことがあれば、それらを気前よくやつてしまふ。しかしこれらのことはすべて、親の財産だけに限られて行わっていた。善良で高潔な心の持主であることと自負する親はけつして子どもの所有物には手を触れなかつた。物を所有することの価値は、所有者がそれを他

人にやりたいと思ったときに、それを手放すことのできる権利をもつてることにあるからである。したがって、子どもの所有物は、子どもがその処分について彼自身の意志で決めることができるようになるまでは、親といえども神聖で侵すことのできないものであつた。このように、スー族の子どもが大きくなつて示す寛容性は、吝嗇を悪とみなし、「金錢」を不淨と考えることによって植えつけられたのではなく、与えることを善とみなすことによつて培われた。また年長者たちが財産全般に対してとる態度や、特に子どもの所有物に對してとる態度の中に示された手本を見習うことによつてそれは維持されていたのである。そして、自由に与えるという寛容性のしつけは、子どもの自我が発達し、子どもが自律的に決断を下すことができるようになるまで延期されたという点にエリクソンは特に注目している。なぜなら、この時期に子どもが自分の自由意志でそれを決めることを許されることは、発達課題である自律性の獲得をうながす重要な経験であるというのが彼の主張だからである。

る。

いうまでもなく、人に物をやつてしまふという経済原則や、寛容性を非常に名誉とする考え方は、かつては彼らの社会的必要性と結びついていた。遊牧の民は持運ぶことのできる範囲内の、しかもそれでことが足りる最小限度の家財道具を必要とするだけであった。また狩猟を生業とする彼らは、腕のたつ、幸運な仲間の気前のよさに依存しなければならなかつたのである。しかし、必要性は眞の道徳よりも早く変化する。元来、徳目は、個人、或は集団の自己保存を保障することを意図したものであつたが、それは人類の死滅という恐怖の圧力のもとに硬化してしまい、その結果、変化する必要性に対しても人々の適応をかえつて困難にしたのであった。白人の政策によつて野牛を追う遊牧民としての生活様式を奪われたスー族の場合、古い徳目の遺物が原型のゆがんだ形で存続しつづけ、新しい文化的同一性の形成をさまたげる結果となつた。寛容性という徳目も、その総体的な經濟的意義が失われて、一般的に守られなくなると、ばらばらに崩れて他の性格特性と結びつき、たとえば貧しい白人の浪費癖や不注意といったまわりの集団の特性と融合してしまつたのである。

スー族の寛容性と並ぶもう一つの徳目は不屈の精神である。インディアンの場合には、それは勇敢であることと加えて、憤怒であり、かつ困難や苦痛に耐える禁欲性をも意味していた。先に触れたように、インディアンの乳児は、昼でも夜でも泣くたびに乳房が含ませられた。しかしこの楽園にも、また禁断の実はあつたのである。すなわち、乳児は乳を飲むことを許してもらうためには乳房を噛まないで乳を飲むことを学ばねばならなかつた。乳児が噛むことを覚えて、母親の乳首を激しく噛むようになると、母親たちは乳児の頭をごつんとなぐり、乳児は狂つたように怒りだす。泣くことは子どもを強くするという言葉をインディアンの母親たちが口にするようになるのはこの時であった。将来、りっぱな狩人になるかどうかはこのときの怒りの激しさから知ることができきると彼女たちは信じていた。そしてスー族の幼児は、

このように怒りはじめると寝かごに首まで入れられて革紐で縛りつけられる。彼は手足を動かして怒りをあらわすことさえできなくなる。このような幼児期の経験が、この部族をしてのように憲猛性を發揮させることになったのであろうか。もしそうであるならば、寛容な母親たち自身が歯の生えてきた乳児に「狩人の憲猛さ」を喚起したことになる。すなわち、彼女たちによって噛みたい願望を抑制され、一層かきたてられた乳児の怒りは、やがて成人後に、獲物や敵の追跡や捕獲という社会的に承認された吐け口に向けられたのであった。

このように、それぞれ文化において高く価値づけられ、求められている特性は、子どもの行動に対する親の期待と結びつき、またそれが親のしつけに反映されるのである。それを実証する、しかももっとわれわれに身近かな例証として、先にあげた東、柏木の研究をもう一度ここで引用してみよう。それによると、子どもの就学前後の発達課題に関して、どのようなことがいつ頃できるようになってほしいか、またそれらがどのような順位で

重要であるかなどについて母親の発達期待を測定したところ、日米間に有意差が認められたのは次の項目であったという。すなわち、日本の母親は、情緒的成熟、従順、礼儀、自立について、米国の母親よりもより早期に子どもが達成するよう期待しており、他方、米国の母親は言語による自己主張および社会的スキルという二つの面の発達を日本の母親よりもより早期に期待していた。さらに、日本の母親の発達期待の特徴は、情緒的成熟の項目に含まれている自分の気持や感情をコントロールすることや制止することを求めている点や、従順の領域中、「呼ばれたらすぐ返事をする」「親からいけないといわれたら、なぜかわからなくてもいうことをきく」など、大人の命令、指示、禁止への従順さ、素直さを求めている点などであった。またそれらがより早期にできるようになることを期待していた。これは、日本でのいわゆる「よい子」の一つの条件とされている「おとなしい、素直である」ことの反映とみるとみると分析されて

で自分を主張し、リーダーシップをとり、また思いやりをもち、協調もするといった同年齢の子どもの集団生活をうまくこなす社会的スキルを早く身につけることを日本母親よりも強く期待している。しかも米国の母親では、この社会的スキルの習得の方が親への従順よりも早期の発達課題であると考えられている。この言語による自己主張の重視や早期期待は、言葉ではつきりと表現することや、自分を主張することが、日本とはちがつて強く求められ、或は重要視される米国との文化的背景を反映したものと解されている。そうした母親の発達期待が、具体的にどのような影響を子どもに与えているかを考察した結果をみると、たとえば、積木分類実験では、正反応に関しては日米間に差はみられなかつたが、両国の子どもは、求められた課題遂行に忠実であり、また、誤りや脱線をしてはならないと固く緊張していた。米国の子どもは、のびのびと振舞い、誤りや脱線をおそれず、また拒否を抑えることもなく、くつろいだ態度を示したと

いう。このような日米の子どもの反応の違いは、さらに彼らの認知スタイルとしての熟慮型—衝動型とも関連していることが明らかにされ、特に、日本の子どもは米国の子どもよりもかなり早期に衝動型から熟慮型へ移行することが見いだされているのは興味深い。

もちろん、十分に発達した道徳性は賞罰によるしつけや観察学習だけによって形成されるものではない。それは子どもの知的発達とも密接に関連している。道徳的発達に関するピアジェの研究によると、幼い子どもは、行為の意図を無視して、結果論的判断をする。年齢が大きくなるにつれて、行動の動機を理解する動機論的判断が優位を占めるようになり、さらに、規則、原理、理想を体系としても段階に至り、主観的判断行動をとるようになるという。つまり、知的発達にともない、他律的道徳から相対的、自律的道徳へと質的に異なるいくつかの段階を示しながら、大人の道徳的レベルへ達することが明らかにされている。認知理論家のコールバーグも、子どもが成長するにつれて、増大していく抽象的、論理的

次元によって、道徳的判断がなされると指摘している。

彼は、発達の初期の段階では、学習理論と同じように、報酬と罰が子どもの判断を方向づけるとしているが、その後の段階では、それは法、相互性、人間の価値などの原則に基づいた判断であるといっている。この水準の道徳性は、その行動が他者にどのような影響を与えるかということから行動を評価し、とりわけ自由や個人の権利の原則などに強い関心が向けられるようになる。

このような道徳性の発達に関連して、藤永の非行少年には一種の知的な停滞や未熟さがあるという興味深い指摘が思い出される。彼らが行なった非行少年の研究で、非行少年、同じ年ごろの中学生、大学生の三者に、道に落ちているお金を黙って懐に入れてしまった場合、何円ぐらいならば悪いことになるかという質問をしたところ、当時（十数年前）の金額でいうと、非行少年はたとえ一〇円でも懐に入れたら悪いと答え、中学生はもう少し高い金額を指定し、五〇円ぐらいまでならよいといい、大学生は一〇〇円ぐらいが境目であったという。非

行少年は道徳観がないから罪を犯すと一般に考えられるがちであるが、この結果からは、むしろ、彼は道に落ちている金は一円でも懐に入れれば悪いことであるという考え方をもつてることになる。普通の少年の場合、一〇円ばかりのお金を交番にもつて行つても、多忙な警官にはかえって迷惑であり、それよりも街頭募金の寄付でもまわそうというように、臨機の判断をすると思われる。非行少年には、そういう判断ができず、道に落ちているものをとつてはいけないというルールに文字通りに従つているのである。藤永は、そのような非行少年の判断は律法主義的であるといつてはいる。また、それは、外部に明確なルールがあると、それに従いやすい、或はルールに依存する傾向が強いということで、知的発達が他律的段階にとどまっている状態であると指摘している。

それはまた、幼児期からの知的教育が成熟した道徳性の発達にとって不可欠の条件であるということを強く印象づける研究結果もあるといえよう。

他律的道徳への変化は、ピアシェの研究では、およ

そ七歳頃を境にしてあらわれてくるという。その児童特有の道徳観の主たる前提条件は、子どもの思考の自己中心性であるとされ、それは集団関係の中に子どもをおくことによって克服されると考えられている。子どもは、そこで他者の別の要求や考え方のあることを知り、それらとの相互的調整の必要性にせまられる。そして、今、自分は何をなすべきか、それはなぜかなどと因果的に考えるようになる。こうして、実際的な相互的協調の経験から、より成熟した道徳的判断ができるようになっていく。家庭ではこのような相互的協調性は育てにくい。幼稚園や保育所での集団生活の機会を子どもに与えることが望ましいといわれる根拠は一つはここにあるのである。

### 参考文献

- 1 東・柏木・ヘス『母親の態度・行動と子どもの知発達—日米比較研究』東京大学出版会一九八一
- 2 Bruner, J.S. et al.『認識能力の成長上・下』岡本ほか訳 明治図書一九六八一六九
- 3 Erikson, E.H.『Childhood and Society』New York: W.W. Norton, 1963, 1st ed., 1950. (上科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房一九七七)
- 4 藤永保編『児童心理学』有斐閣 一九七三
- 5 藤永保『児童の発達と教育』有斐閣 一九七九
- 6 Kohlberg, L. "Development of moral character and moral ideology," in *Review of child development research*, Vol. 1, New York: Russell Sage Foundation, 1964.
- 7 Newman, B.M., and Newman, P.R., "生涯発達心理学," 福富・伊藤訳 川島書店 一九六〇
- 8 Piaget, J. "児童道徳判断の発達" 大伴訳 同文書院 一九五七

いう発達的要因によってのみ規定されるのではない」とを明らかにしている。したがって親や教師は子どもをしつける過程において、子どもが自分自身の行動を統制することを教えるだけでなく、自分の行動が他者に対してどのような意味をもつかを根気よく言葉で説明し、子どもに理解させる努力が大切である。そのような具体的な経験を基礎にして、言語を通して子どもの抽象化能力を育てていくことが自律的道徳の水準への移行をより確実なものにすると考えられるからである。 (津田塾大学)

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと

守 永 英 子

私たちの園では、春と秋と、年に二度の遠足をする。春は母親といつしよで、秋は、子どもだけでバスで行く。十月六日は、三才児クラスの子どもたちにとっては、初めて、親から離れて、自分たちだけで行く遠足であった。

手を振って見送る母親たちを残して、バスが出発して間もなく、男児Nが、にこにこしながら、「なんだか、おうちに帰るみたい」と言う。登園の時とは違つて、帰りは、お友だわといつしょだからでも乗るバスと違うところを見つけようとするかのよ

うか。母親と別れてきた不安はなく、少し、はしゃいだ気分でさえあるように見える。「このバス好きになっちゃつた」と、又、Nが言う。Nの心の動きを面白く思つて「なぜ?」と問い合わせる私に、Nが説明してくれた。「だって、いすが、こう(前向きになつて)いるという意味らしい)なつて いるでしょ。普通は、こういうふうに(手で横に長くつながつて いる様子を示す)なつてるよね」そして、いつ

うに、周囲を見まわして、「ガラス（前面の）の上の方が青くなってるし、上方（天井）も新幹線みたいになつてゐる（換気口のことらしい）……。ほら、たばこの灰を入れるところもある！」

「そうね」と答えながら、私は、このバスとNの言葉の対比を面白く思つた。というのは、このバスは、もう十数年も大学で使つていて、買替えの話も出ているほど、古くて、お世辞にもきれいとは言ひ難いものであつたから。

Nは、バスを好きになつた理由を、バスの側に求めたが、私から見れば、それは、Nの側に求められるべきものであつたようだ。Nが遠足を、うれしく、はずんだ気持で受けとめていることによる周囲の“見え方”ではないだろうか。

“見え方”的問題は、3月号、7月号でも、女兒Tの話として触れたが、随分興味深い問題を含んでいるように思われる。このことは、子どものみに限らない。おとなも又、この問題にぶつかるのである。

遠足といえば、子どもたちが並んで歩く姿が、すぐ、目の前に浮かぶなど、"並んで歩くこと"は、当然なこととして受けとめられている。ところが、今年の私のクラスは、それが、どうもうまくいかなかつたのである。一学期には、並んで歩けず、すぐにバラバラになつてしまつたこのクラスも、秋の遠足や運動会の頃には、歩けるようになるだろうという私の期待に反して、この時期になつても、一向に、上手に並んで歩けるようにならない。運動会も近いことでもあるし、いささか焦りを感じて、手をつなぐ相手を考慮しながら、男児と女児を手をつながせ、前後の関係も、なるべくトラブルが起ころないようになると配慮して並ばせても、歩き出すと、すぐには列が乱れてしまう。「Aちゃん、あなたは、○○ちゃんの後でしよう。追いこさないで、並んで歩きましょ」と言って見ても、にこにこと楽しんで歩いている子どもには通じないで、どうも、私の一人相撲のようである。

苦笑しながら、私にとつて『並んで歩くこと』とは、どんなことであろうかと、ふと考へてみた。そ

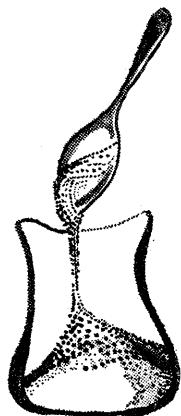
ういえば、おとなになつてからは、あまり並んで歩かせられた記憶がない。駅などで、人の後について歩かなければならぬときは、『歩きにくい』と少々不快に感じ、なるべく、人の少ないところを歩こうと思う。並んで歩かされた一番近い記憶は、高校の修学旅行であろうか。お寺や仏像を、並んで歩きながら見ることは、あまり愉快なことではなかつたようだ。

つまり、『並んで歩くこと』は、私にとつて、あまり愉快なことではなかつたにもかかわらず、私は、それを、子どもにもとめていたのである。そう思つた時、二十数年間も、当然のように、『並んで歩くこと』を求めていた自分に、驚きすら感じた。では、なぜ、集団生活の中で、『並んで歩くこと』が必要なのであろうか。『並んで歩けるようになる

こと』は、子どもの成長のために必要不可欠なことなのであろうか。

どうも、これは、『おとなにとつての、集団管理上の便宜さ故ではないだらうか』と思えてきたとき、『並んで歩くことの出来ない子ども』に対する私の『見え方』もどうやら変つてきたようである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑧

### 水沼昭子

皆でうどんを作る……園生活での楽しいひとときである。「今日も作る?」寒い日などなおのこと楽しみに待つ。折り紙やクレヨンで遊ぶ様に子供達の園生活に溶け込んでいるうどん作り。ボールの中に強力粉と薄力粉を入れ、塩を少しと水を入れて行く。入れたはずの水が粉の中に埋まつて見えなくなる不思議さを、

いつも同じように持ち続けながら、もう、その作業のころは周囲を取り廻す子供達にとって手を出したい瞬間だ。そしてボールのまわりから、ゆっくり手を入れて混ぜて行く。小さい塊りが手の動きの中で大きくな

り、やがて一つの塊りになる。その時、かならず子供達は耳たぶをさわる。次に粉の塊りをさわる。「もういい固さかな」と調べる為である。「耳たぶの固さがいいんだよ」そう教えてくれたのは年長のD介であった。幼稚園のうどん作りは、このD介によつてはじめられたものだ。

神経質で友達の動きや言葉がいつも気になつて、そな事がトラブルを起し、友達との関わりを上手に持つないタイプのD介。気持を伝えたり、我慢することが苦手なD介。考える力も表現する力も、どの子よりも

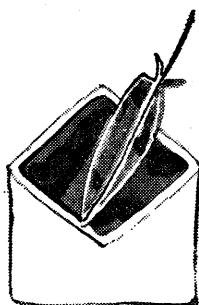
も豊かなはずのこのD介の毎日の様子に心を痛めながら、どうにかして仲間の中で本当のD介の良さを示させたいと考え続けていた。そんな時だった。連休明けの登園に、「信州のおじいちゃんちで、うどん作って来たんだ」彼は、あいさつも忘れて報告した。その表情と言葉が私の心中に広がっていった。その日、D介の隣りで昼食を食べながら、うどん作りの話を聞いた。とてもうれしい経験だったに違いない。夢中で話すD介の明るい表情や声を受けとめながら、「こんなD介を仲間の中で見せてやりたいナ」との思いで話を聞いた。D介の小さい手から作り出されるうどん。そのうどんを茹でるD介のおばあちゃんの笑顔までが伝わってくるようだ。「幼稚園でもうどん作らない？ むずかしいかな？ できるかな？」私は思わずD介にそう語りかけていた。前後の計画も準備もないと云われるかもしれない。しかし、D介の表情、言葉、そして周囲の子供の表情を見た時「これだ！」と思ったのだ。

D介は想像もしていなかつた私の申し出に驚きながら

承知をした。お母さんに材料と作り方を聞いてくる事を約束してその日は終った。無論、降園時に迎えた母親には、その日の事を事前に報告をして家で受けとめてもらうようにした。翌朝、いつもより早く登園して来たD介の手には、母親が書いてくれたうどん作りの材料などの紙が、しっかりとぎらっていた。材料が整えられた数日後、D介を中心にうどん作りがはじまつた。粉と水を混ぜるD介の小さい手。ボールの中で手首を上手にまわしてこねてみせるD介に、まわりに集まつた仲間達は驚いた表情を向けた。すぐやつてみたい子が数人うどん作りに加わる。見ている時は簡単そうでもD介のようにはうまく行かない。「すごい。Dちゃん、うまいんだね」D介に向けられる言葉が輝いているようだ。「Dちゃんがいじめた」「Dちゃんがとったのー」それまでD介への言葉は沈んで重かつた。輝いた言葉の中でD介は耳たぶをさわって「この位の固さになつたらいいんだよ」と教えたのだ。この位の固さになつたらいいんだよ」と教えたのだ。D介の手でこねられた粉の塊りを、私はクッキ

ング・シートの上でのして見せた。代用のケーキのローラーに粉をいっぱいながら、広く、大きくのされて行く塊りに、また子供達の歎声があがる。D介の小さい手がその上に粉をふりかけ、私が塊りをたんで細く切る。不思議な作業に呑まれたような子供達。「うわあ。やっぱり、ほんとのうどんだ」「やつたあ」茹でられたうどんがざるの中に現われた時、安心したような、おどろきとうれしさの混ざった言葉が飛びかた。その日のおべんとうは、先生の作つておいた、だし汁をかけたDちゃんの作つたうどんを少しづつ味わつた。「ほんとに、ほんとのうどんだね」「Dちゃんすごいね」。こうして幼稚園のうどん作りは始まつた。

D介はこのうどん作りの中で彼の持つ本来の力を上手に出しあげた。また、仲間の、D介を受けとめる思いも少しずつ変つていつた。D介のうどん作りが皆のうどん作りになつて行く中で、D介のイライラした姿は、ほとんど見られなくなつた。



(千葉・愛隣幼稚園)

このうどん作りの関わりは安易な、無計画なものだとの批判を受けるかもしれない。単なる思いつきではなかつたかとの意見もあるかもしれない。しかし、時にはこうした、その時、真正面から受けとめてやることを通して、また、子供達の出来事と受けとめ、それを広げて子供達の生活の中に投げかえしてやる。

うどんを上手につくる…為にではなく、その事を通じてD介の新しい面を、本来の姿を仲間の中に示していく。その一つの手だてとして、今も、あの時の思い行く。その一つの手だてとして、今も、あの時の思いは大事にしたいと思うのである。

# 就学前教育における教材の研究 —絵本の構造分析—

秋場美智子

## はじめに

幼稚園・保育所の保育者達が集まって、保育の問題について、いろいろ話し合っている時、園で来年どのようなことばのワーク・ブックを選んだらよいかということで、検討が進められているとの話題が提供された。実際にワーク・ブックを使用して言語指導をした保育者からは、ワーク・ブックを使用することの積極的意義が見出せ得なかつたとの意見、ワーク・ブックの内容に疑問を

感じたとの意見などが出された。そして、ワーク・ブックの問題点を探ることになり、幼稚園・保育所での使用の実態とワーク・ブックの内容分析が行なわれたのである（日本保育学会第三十二回大会発表）。その結果、ワーク・ブックが言語指導のなかでも構造的側面が大部分であり、その取り上げ方にも問題があることが指摘され、総合的な言語指導を考えなければならないことが論じられた。

言語指導のねらいである「話す」「聞く」「考える」こ

とを網羅できる教材として、手近に入手でき、かつ活用範囲の広いもので、乳児期より親しむことのできるものとして絵本がある。これまで、絵本を教材として活用することについては、消極的であった場合が多く、絵本のもつ効用を積極的に認識し、体系的に活用することは稀であつたようと思われる。そこで、これまでの絵本の活用について見直し、言語指導における絵本の果すべき役割を確認し、絵本の活用の視点についての研究が進められてきた。(日本保育学会第三十三回大会発表)

今回の「絵本の構造分析」はこれら一連の継続的研究の一つであり、子どもに好まれる絵本の物語構造を分析し、その特質を明らかにすることによって、絵本カリキュラム作成にあたっての方向性を述べたものである。

### 絵本の構造分析

#### 一、分析対象

子どもに好まれる物語絵本を神沢良輔他の研究「乳児の絵本についての興味とその発達」(日本保育学会第

二十九回大会) や奈良女子大附属幼稚園幼年研究会編「絵本との出会い」(ひかりのくに)、市村久子「子どもと絵本」(月刊絵本別冊、すばる書房) らの貸し出しデーターより五九冊選定し、分析対象とした。なお、この中より上位二十までを抽出し、三才—二十八冊、四才—二十七冊、五才—二十一冊をその年令に好まれる絵本とした。

#### 二、分析の視点

次の視点より分析を行なつた。

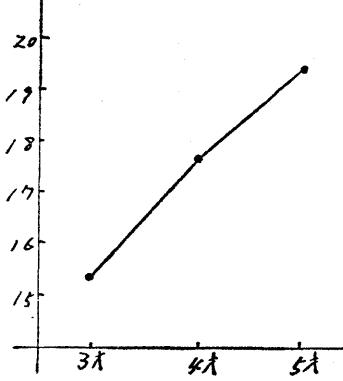
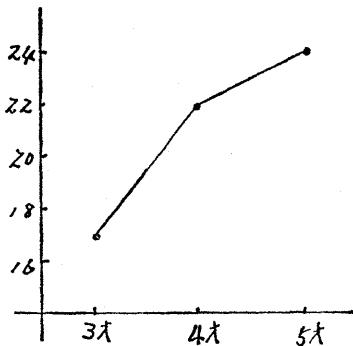


図 2

表 1

	3才	4才	5才
導入	2.61	3.74	4.71
展開	12.46	15.70	16.38
結末	2.14	2.56	2.96



(↑見開き・(↓)場面・(☰)登上人物等・凶事件・話題

### 三、結果・考察

#### (↑)見聞き

物語のある場面が二ページにわたって映像化されているのを一つの見開きとして数える。図1は各年令の見開き数の平均値をグラフ化したものである。年令が上昇するにつれ、見開き数が増加している。三才と五才では一、三倍であり、t検定の結果は $t = 1.93$ で $.10 > p > .05$ であり、有意差傾向がみられる。

#### (↓)場面

##### ア、場面数

ある一つの行動が描写されている場面を一として考え、その合計点をもつて場面数とした。従つて、一つの見開きの中に二つ以上の場面が含まれていることがあらる。

図2は、各年令の場面数の平均値をグラフ化したものである。見開き数と同じように年令が上昇するにつれ増

加している。三才と五才では一・四倍であり、 $t$ 検定の結果は $t = 2.22$ 。 $.05 > p > .025$ で有意な差がみられる。

表1は物語の内容を導入、展開、結果の三部に分けて、その平均値を示したものである。導入と展開の部分が年令とともに増加しているが、結末の部分は変化がみられない。

#### イ、場面割りの特徴

場面割りの特徴としては、次の三点が考えられる。

A、登場人物の動きに即して場面割りがなされている場合

登場人物等の行動に即して、一つの場面が見開き、あるいは一ページの中にある場合と、見開きあるいは一ページの中に幾つかの場面や状況の変化が並列化される場合とがある。前者には「どろんこハリー」や「もりのなか」の「～すると～しました」の繰り返しの場面があるし、後者には「だるまやんとかみなりちゃん」のうきやくらをとる場面がある。

主人公の動きにあわせて、ページが移り変ることは、

同時に時間が推移していくことであり、時間の経過に伴うストーリーの展開が理解できるが、並列されている場面は同一空間にあるため、一つ一つの場面が時間的に異なるものであるとの理解は困難となる。例えば「かにむかし」のさるがはちや牛の糞などで攻撃されている場面は見開きに並列化されているため、同一のさるであるにもかかわらず「四」と反応したりする。

B、物語の中心となる一場面がとらえられて、描写されている場面

物語の話題が二～三つあり、その一つが見開きあるいは一ページに映像化されている場合であり、「ゆきのひのうさこちゃん」がある。一つの話題が見開きあるいは一ページに描かれているということは、ストーリーと絵が一致していることであり、年令が低い子どもにとっては理解が容易であるが、ストーリーの中心となるある場面のみが映像化されている場面は、ストーリーに即してイメージをよくらましていくなければならず、高度な理解力を要する。

C、見開きあるいは一ページに中心となる絵があり、

周囲に説明のための絵が描写されている場合

代表的なものとしては「はたらきもののじょせつしゃ

けいていー」や「ちいさいおうち」がある。これらの絵

本の場合には、絵を細部にわたって読みとるということ

が必要とされる。

### (三)登場人物・動物・もの

#### ア、登場人物等数

表2は各年令ごとの人物

等の全体の平均値と中心人

物等の平均値を示したもの

である。全体でみると年令

が上昇するにつれ、登場人

物等が増加しているが、た

II 1.44 - 25 > p > 10 で有

意な差はみられない。中心

人物等は、年令による差は  
みられない。

#### イ、中心人物等の展開

ストーリーの展開に伴い中心人物等がどのように変化

するかを類型化すると大きく三つに分けられる。

##### ☆貫性型

中心人物等が物語の導入から結末まで貫して出てく

るタイプである。このなかには、中心人物等にいろいろ

なものが加わっていく加算型（「とらつくとらつ

くとらつく」）、加算型と出会い型の混合型（「も

りのなか」）がある。

##### ☆順番型

中心人物等が順番に出てくるタイプであり、「三ひき

のやぎのがらがらどん」「シナの五にんきょうだい」が

ある。

##### ☆複線型

時間的なずれにより、中心人物が変化するタイプで、

先に行ってしまった主人公を後から追いかけていくよう  
な場合であり、「さて。。。の方は」というような表現が

表2

	3才	4才	5才
人物等の全体	5.71	6.01	7.29
中心人物等	2.41	1.74	1.81

なされる絵本である。代表的なものとしては「いたずら  
きかんしやちゅうちゅう」「ふしぎなだけのこ」がある。

#### ウ、中心人物等の性格

中心人物等の性格の成長や特徴がストーリーの展開に重要な役割を果している絵本がある。一人の中心人物等がいろいろな経験をすることによって、大きく成長していく過程が描かれているものとしては「ぞうのべべー

ル」や「ぐるんばのようちえん」がある。また、中心人物等の性格—強い・弱い・良い・悪い—を対比することで物語が展開されていくものとしては「おおかみと七ひきのこやぎ」「かにむかし」がある。

#### 四、物語の構成

物語の構成は二つに分類できる。第一は、物を獲得するとか、悪物を退治するとか、事件解決に向ってストーリーが展開される事件解決型である。代表的な絵本としては「おおきなかど」「かにむかし」「十一ぴきのねこ」がある。

第二は、いろいろな事件が次々に起きることによつ

て、ストーリーが展開する事件展開型である。これには、中心人物等が移動するにつれて、時間や状況も変化するタイプの絵本—「ひとまねこわる」「とらっくとらっくとらっく」「おばけのべーべーべー」と、中心人物等は固定しているが、時間や状況が変化するタイプの絵本—「わいさいおうち」「びかくんめをまわす」がある。

#### 四、カリキュラムを立てるための視点

子どもにいつ、どのような絵本を与えるかという絵本選択の基準と、選定された絵本をどのように配列するかというカリキュラム構成、そしてこれらと子どもの発達との関連性を考えることは重要なことである。

これまでの絵本の選択は①子どもが喜ぶ絵本、②読み聞かせに合った絵本、③子どもの年令や生活に合った絵本、④保育カリキュラムに即した絵本ということになされている場合が多く、これらのこととは専ら保育者の経験に大きく依存していた。経験に依存したかたちで絵本の活用を考えいくと、新しい絵本を手にしたとき、目的

があいまいなまま試行錯誤的に与えてしまった可能性があるし、また保育経験が浅い保育者にとっては、大きな障害をきたしてしまう。

子どもたちが喜んでくれるであろうかと疑問を抱きつゝ子どもと絵本との出会いがあるよりは、この絵本は○○のような特質があるので、子どもたちの反応は○○なのではないか」と仮説的なものをもって、子どもと絵本が出会えるのでは、次の時の保育に大きな違いをもたらす。保育者が絵本の中のどのような楽しさを子どもたちに伝えるのかがカリキュラム構成の基本であるが、その際、場面割り、登場人物・動物・もの、物語の構成について分析のうえ、これらの相互関連性を考えいかなければならぬ。

#### (一) 見開きと場面割りとの関係からみた場合

最もストーリーの展開がとらえ易いものは、登場人物等の動きにして、一つの場面が見開きあるいはページに描かれている場合である。いわゆる「絵がお話をする」といわれるタイプの絵本である。中心となる一場面

がとらえられて描写されている場合や、中心となる絵の周囲に説明のための絵が描写されている場合は、中心となることを「絵でよみとて」理解し、文章を通して、「想像する」という作業が必要となる。従って、子ども の発達と読みきかせの経験とをふまえて与えることが必要である。

#### (二) 登場人物等の関連でみた場合

加算型、出会い型、混合型などどのタイプにしろ、一貫性型は中心人物等が事件の導入から結末まで出てくるので、物語の中で中心的役割を果しているのは誰なのかを理解するのが容易である。順番型は登上してくる人物等の数が多いと、その順序性がわからなくなってしまう恐れがあるので、登上人物等の数と年令との関係を考慮しなければならない。複線型は主人公と副主人公とが時間的にずれて登上するので、年少児の場合は全体的なストーリーの流れを理解するのは困難である。

#### (三) 物語構成との関連でみた場合

事件解決型と事件展開型に分類される物語にそつて、

どのように場面割りがなされているのか、どのように絵による形象化がなされているかが、ストーリー展開の理解の鍵を握っている。

### まとめ

絵本は絵と文から構成された文化財である。この文化財に無理なく楽しく出会えるようにするためにはどうのうにすればよいのか。今回は物語構造という観点から分析し、問題点を考えてきた。絵本の構造を知ることにより目的的な絵本の活用が可能となるわけであるが、それは第一に、絵本の構成の難易度が促えられるからである。ページ数が多いと一見難しそうな印象を与えるが、場面割りとか登上人物等の展開の仕方みるとそうでなかつたりする場合がある。第二には、難易度がわかることにより、どの年令の子どもたちに与えたらよいのかのカリキュラム構成の視点が明らかになることである。同じ一冊の絵本であっても、年令により指導のキーポイントになる点が異なることがわかり、子どもの成長に合せ

ての段階的な活用が考えられる。

絵と文からなる絵本において、物語構造の分析の他に解明しなければならないのは「絵」と「文」についてである。子どもがどのような絵に関心をもち、どのように絵を読みとっているのか、またどのような文体であれば理解されやすいのかなど、これらのことについては今後の課題である。（栃木県身体障害医療福祉センター）

### 付記

本研究は安藤智恵子（陽西保育園）、岩原陽子（清愛幼稚園）、小池栄子（釜井台幼稚園）、手塚久美子（瑞穂野保育園）、中村悦子（大妻女子大学）による協同研究である。

なお、本文において取り上げられた絵本の作者名及び出版名は別表のとおりである。

絵本名	作者名	出版社名
どろんこハリー	ジーン・ジョン文 マーガレット・ブロイ・グレアム絵 わたなべしげお訳	福音館書店
もりのなか	マリー・ホール・エツツ文絵 まさきるり子訳	"
だるまちゃんとかみなりちゃん	加古里子作・絵	"
ゆきのひのうさこちゃん	ディック・ブルナー作・絵 石井桃子訳	"
はたらきもののじょせつしゃ けいていー	バージニア・リー・バートン作・絵 いしいももこ訳	"
ちいさいおうち	バージニア・リー・バートン作・絵 いしいももこ訳	"
てぶくろ	ウクライナ民話 エウゲーニ・M・ラチョフ絵 うちだりさこ訳	"
とらっくとらっくとらっく	渡辺茂男作 山本忠敬絵	"
3びきのやぎのがらからどん	北欧民話 マーシャ・プラウン絵 せたていじ訳	"
シナの5にんきょうだい	ワレール・H・ビショップ文 クルト・ビーゼ絵 いしいももこ訳	"
いたずらきかんしやちゅうちゅう	バージニア・リー・バートン作・絵 むらおかはなこ訳	"
ふしぎなたけのこ	松野正子作 瀬川康男絵	"
ぞうのバーバール	シャン・ド・ブリュノフ作・絵 やがわすみこ訳	評論社
ぐるんばのようちえん	西内みなみ作 堀内誠一絵	福音館書店
おおかみと7ひきのこやぎ	グリム童話 フェリックス・ホフマン絵 せたていじ訳	"
おおきなかぶ	内田莉莎子再話 佐藤忠良画	"
ぴかくんめをまわす	松居直作 長新太絵	"
かにむかし	木下順二文 清水崑絵	岩波書店
ひとまねこざる	エツチ・エイ・レイ文・絵 光吉夏弥訳	"
11びきのねこ	馬場のぼる作・絵	こぐま社
おばけのバーバーバ	アネット・チゾン作 タラス・ティラー やましたはるお訳	偕成社

〔史料紹介〕

## 『邦訳 日葡辞書』⑥

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

### F字で始まる語

(承前)

ホンバラ (本腹)

嫡出子。

(例) あれ本腹の子ぢや、または、あの子本腹ぢや。(あれ  
は嫡出子である)

ホンブク (本腹)

正しい本来の妻。

ホレ、ルル、レタ (耄れ、るる、れた)

強く愛好するものとか、心ひかれるものとかに熱中してい  
しつけが悪くて物事をするのに下品なこと、または、礼儀  
あるいは、夢中になつてゐる。

(例) 子に耄るる (子どもに常軌を逸する程の度外れに愛情  
正しくないこと。

ハウダイ (放題)

ハウコ (這子)

道化手品師。

大きな人形。

ハウダ (放題)

しつけが悪くて物事をするのに下品なこと、または、礼儀

正しくないこと。

(例) 子に耄るる (子どもに常軌を逸する程の度外れに愛情

を抱く)

ハウサウ (疱瘡)

天然痘。

ホソノヲまたはヘソノヲ (臍の結)

赤児が生まれた際に臍につけていたはらわた。

ホトラリケ (ほとほり氣)

子供の熱の出る病氣。

(例) ホトラリケニ ゴザル (ほとほり氣にござる) 热の出

る病氣にかかっている。

ハウエ (胞衣)

エナに同じ。母の胎内で胎児が包まれている小さな皮、あるいは、皮膜、すなわち胎衣。

ホエル (吠・吼える)

犬が吼える、牛がうなる、狼が吼えるなど。また比喩。幼い者や年若い者の泣くことを言う下品な言い方。

フカウ (不孝)

父や母に従順でないこと。

フクゲ (ふく毛)

幼児や、その他鬚の生えていない人の顔にある柔らかな毛

〔うぶ毛〕。

フクログ (袋児)

胞衣に包まれたまま生まれた胎児。

フクシ、スル、シタ (復し、する、した)

学んだり聞いたりした事を繰り返して見る、あるいは、見返す。

フケウ (不孝・不興)

子が親に對して、または、弟子が師匠に對して従順さを保たないこと。

フリソーデ (振袖)

九州方言の語。子供が着る習わしになつてゐる着物の、「腋の下の」開いている袖。

フリソヅミ (振鼓)

子供が使う小さな手太鼓の一種。

フリワケガミ (振分髪)

五、六歳の子供の髪で、ぱらりと垂らしたままで、結ばないでいるもの。詩歌語。

フルコト (古言)

ある人が昔子供の時分に言つた言葉。詩歌語。

フタツゴ (二つ児)

二歳の幼児。

## G字で始まる語

(例) イバラガキニ セラルル (棘搔きにせらるる) 子どもたちが喧嘩をして、互いに顔を引っ搔き合う時のように、人から搔きむしられる。

ゲンプク (元服)

子供に大人としての名前をつけ、初めて刀を佩用させること。

グシ (愚子)

おろかな子。知恵の浅い子ども。愚息という方がまさる。

父親が息子の事を諱遜してこのように言う。

ヂダダ (地だだ)

(例) デダダヲ フム(地だだを踏む) 一種の速い、せっかちな歩調で地面を踏みつける、または、両足で地面を打つ。

ヂョクケツ (濁血)

婦人が産後に排出する血のよう、悪い腐った血。

## I字で始まる語

イヌバコ (犬箱)  
雨腕に抱いて育てる。

厚紙で犬の格好に作った箱で、子供がおもちゃにするもの。

イキアイキヤウダイ (行合兄弟)

子どもを持つ二人の人が結婚すると、それぞれの子ども一人一人は、女親か男親かに対して繼子の関係になるけれども、子どもたちは互いに兄弟のような間柄になる。このような関係にある二人の子どもたちを言う。

イロヲナオス (色を直す)

着物の色を変える。たとえば、赤子が誕生後二十日か三十日あとにし、結婚する人が二日か三日あとにするように、または、ある死者のために喪に服した人が喪あけにするよう、着物の色を変えること。すなわち、これらの人々は、すべて白い着物をぬいで、種々の色のついた着物を着るのである。

イバラガキ (棘搔き)

茨でひつ搔かれる」と。

十月初旬に、中国から児童の教育、福祉、保健の分野で行政の指導的立場にある方々が、日本の児童関係の仕事の現状の視察に来日された。その折に、お茶の水女子大学付属幼稚園と児童学科に半日をさいて訪問された。これまで欧米や東南アジアからは、多くのお客様が来られたが、中華人民共和国からの訪問ははじめてだったので、少なからず緊張して準備し、お迎えした。一行十名の方々は、紹介を伺うと、それぞれが行政面で大へんな責任を負つておられることがわかつたが、いずれも、にこやかな五十年代の女性であった。幼稚園見学のあと、二時間ほど児童の学術研究の現状を、児童科の先生方と共に説明し、懇談した。日本語を話す方はひとりもなく、英語をわかる方が三、四名あったが、中国文学の中山時子教授が通訳の労をとつてくださったのは有難いことであった。話される口調は穏やかだったが、私共が話した内容が

理解されており、大きな視野の中で考えられた質問がところどころになされたことに驚いた。東洋人はお互に外見が似ていて、どの顔をみても、ずっと以前から知っている人のような親しさを感じる。そして、この女性たちが、それぞれに、根本的なことに目をつけて、自分で考えている人たちであることが、話しの中心に察せられ、そのことに新鮮さを感じさせられた。思えば、五十年代のこの人達は、その若い日に、日本との戦争を体験してきた世代である。それから三十年の間に、いろいろのことがあつたに違いないが、現代の中国にならうこの女性たちが、微笑みをもって、ゆったりと応答する姿には、同じ年代を過してきた者として、考えさせられることが多くある。いつもは昼食から二時まではゆっくりと休みの間に、スケジュールが一杯で疲れたところであった。一九八一年一月号を迎える。

(津守真)

## 幼児の教育 第八十一卷 第一号

一月号 ◎

定価二七〇円

昭和五十六年十二月二十五日 印刷  
昭和五十七年一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学付属幼稚園内  
編集兼

発行人 津 守 真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都千代田区神田小川町三ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京九一一九六四〇番

○本誌御購読についての御注文は発行所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

# 新刊案内

## 障害児保育の現場から

新沢誠治 編著・B6判・336頁・定価1,200円 ￥250円

### 障害児保育を模索しつつ、とりく んでいる保育者たちの座談会

障害児保育の考え方や、具体的な保育の方法について、現場の保育者が事例を軸に語り合う。身辺自立・歩行・ことば・健常児との関係を育てるポイントは何か。親に接する際の配慮すべき点は何か。重度児の保育をどう考えればよいか……。発達理論を学び、目の前の子どもに学びつつ辿った現場ならではの悩み、迷い、感動がいきいき伝わってきます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

**好評発売中!!**

# 気になる子どもたち

——幼児の精神衛生と保育——

どの子もこの子もみな同じ。子どもの心から障害をとりのぞこう。

保育しにくい子どもがクラスにいるときどうするか。さまざまのケースの原因をつきとめ、保育の方法について助言すると同時に保育者の心構えを説きます。

平井信義著・B6判・252頁・定価1,000円 ￥250円

# 私の保育どこが問題？

——“よい保育”を見直してみましょう。——

今まで「よい」と考えられて来た保育が実は子どもを馬鹿にし、駄目にすると言われたらどうしますか？保育日誌を通して、その問題点を指摘し、自主的な子どもを育てる保育の具体例を語ります。

本吉圓子・笠間典美共著・B6判・304頁・定価1,200円 ￥250円

# 大場牧夫保育対談

——幼児教育の本質を求めて——

保育実践者が保育の本質と重要性をさぐる対談集

幼児をどのような人間に教育するのかという教育目標や、幼児保育は何をどう発展させるのかという実践の問題点など、保育の基本的な問題をとりあげて論ずる対談集です。

大場牧夫著・A5判・240頁・定価1,200円 ￥250円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**